

# 甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）

-（都）古府中環状浅原橋線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）

二〇一六・三

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第308集

2016.3

山梨県教育委員会  
山梨県土整備部

# 甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）

-（都）古府中環状浅原橋線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2016.3

山梨県教育委員会  
山梨県土整備部



卷頭写真 1



調査区第2期遺構面（西区）の遺構検出状況（東より）



調査区第3期遺構面（東区）の遺構検出状況（西より）

卷頭写真 2



水場遺構01区画03 遺物出土状況（南東より）



水場遺構01区画01 出土木製櫛

## 序章 調査報告のあらまし

### 1 はじめに

甲府城下町遺跡は、甲府城が築城されて整備された近世城下町です。

この報告書は、山梨県甲府市中央二丁目12-19他、『NTT甲府支店西』交差点北東隅の33.7m<sup>2</sup>を対象に、埋蔵文化財記録保存のための調査成果をまとめたものです。

調査地点は、甲府城跡（舞鶴城公園）の南東に位置し、江戸時代には甲府城に伴う二の堀と三の堀に囲まれた町人地の中、八日町通り・甲州街道（城東通り）と柳町通り（遊亀通り）が交差する交差点の北東隅に当たります。この柳町・八日町のあたりは甲府城下町の中で最も賑わいをみせた場所であると言われています。

この章では本書を利用する際の手引きとなるよう、調査の概要を整理しました。

### 2 調査の進め方

#### （1）調査に至るまで

この調査が実施されることとなったのは、当該地が（都）古府中環状浅原橋線改築事業に伴い、『NTT甲府支店西』交差点の拡幅が計画されたからです。平成23年度に行った道を挟んで対面の地点（北西隅、南西隅）の調査では甲府城下町に伴う江戸時代前半～近代までの遺構や遺物が見られ、陶磁器類をはじめ多くの出土品がありました。特に江戸時代前半期の石臼や金粒が付着したふいご（炉に風を送る道具）の羽口、土器が出土し、金の精錬に関わる資料を確認しました（『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第288集 甲府城下町遺跡』2013（平成25）年3月刊行）。当該地において、2014年6月に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の確認をしたところ、江戸時代の文化層が残っていることがわかりました。この試掘調査の結果を受けて事業主体の山梨県土木部と県教育委員会とで協議し、2015年の5月25日から6月26日までの日程で発掘調査し、調査成果をもって保存するという対応がとられることになりました。詳細は第1章 調査の経緯・経過 第1節にあります。

### （2）調査の方法

調査の方法は、まず試掘調査でわかった埋蔵文化財の深さまでの土（表土）を重機を使って除去します。今回は、狭小地であったため、調査区を東側と西側に分け、反転して調査を行うことにしました。まず調査区東側について表土を除去し、その後、人力により遺構確認や遺構の掘り下げ、遺物の取り上げ等を進めていきました。また、各段階で測量や写真撮影等を行いました。東側の調査を終了後、西側の調査を東側の調査同様に進めていきました。

現地調査終了後は、出土遺物のデータ化や調査中の図面・写真等による記録類の整理等を進め、本書が作成されました。詳細は第1章 調査の経緯・経過の第3節にあります。

### 3 調査で発見されたもの、わかったこと

本調査では、3面の遺構面を調査し、江戸時代を通して造成をしながら生活面を造っていることがわかりました。また、出土遺物は、江戸時代の陶磁器をはじめ、箸や櫛、漆塗りの椀等の木製品、硯、碁石等の石製品、煙管等の金属製品、アワビの貝殻等、出土遺物量は狭小地ながらプラスチック収納箱23箱にのぼります。

細かな内容は第3章 調査の方法と成果の2、3節に報告しておりますが、ここでどのようなものが出土したのか、またわかったことを概観します。

#### （1）中世から江戸時代初期頃の生活面について

##### （第1期、地表面下約1mの地点）

東西方向の礎石建物跡（1軒）や調査区北西部では江戸初期頃と思われるカマド（1基）と土間（1基）が見つかっています。カマドの位置から推測すると、



調査区第1期（西区）完掘状況（西より）

建物の間口が柳町通りにあり、東に向かって細長く伸びる区画で土地を利用していた痕跡が見えました。また瓦の出土はなかったので、建物は茅葺きか板葺きであったと考えられます。

遺物については、中世の瀬戸・美濃の皿、中世と思われる壺の頸部、カワラケ、巨大なアワビの貝殻（殻幅19cm）、礎石の上に乗る柱等が出土しています。

## （2）江戸時代前～中頃の生活面について

### （第2期、地表面下約55cmの地点）

木組みの水路（1条）や水場造構（1基）、木組造構（1基）、落ち込み（2基）、土坑（2基）が見つかっています。注目すべきは、調査区中程から見つかった、杭と板で作られた堰で区画された3つの区画からなる水場造構です。南北方向に並ぶ区画の北の水溜からは江戸時代初期～前期の天目茶碗や志野皿、黒漆の地に赤漆で鶴丸の文様が描かれた漆椀、多量の木製の箸といった食器具が出土しています。南の区画には、木製の横櫛（159点）、硯（8点、硯の裏に「高嶋本青石」と刻まれたものもあります）、将棋の駒、碁石といった日用品や遊戯具が投棄されていました。これらの遺物から考えると、水場造構は一般的な庶民の家のものとは考えづらく、お店の付属施設等なのかもしれません。



水場造構（南より）

その他、大火等で焼失したものが投棄されたことを意味する他の遺物として、被熱した碗や皿、鍋、擂鉢、甕、灯明皿、仮飯器、香炉、火鉢、煙管等が出土しています。

## （3）江戸時代後期から幕末の生活面について

### （第3期、地表面下約40cmの地点）

南北方向の石列（3条）や南北方向の石組み水路（1条）、素掘り溝（2条）、土坑（1基）、焼土（1基）、礎石（4基）、遺物集中（1ヶ所）、配石（1基）が見つかっています。近代のものと思われる水路は地境を示すものと思われます。また、この時期は、石列や水路、礎石建物跡の方向から建物の間口が八日町通り・甲州街道にあり、北に向かって細長く伸びる区画で土地が利用されていたのではないかと考えられます。

現在でも発掘調査周辺地において、地境等に石組み水路がまだ残されていることが、現地周辺の踏査でわかりました。

遺物については、多量の陶磁器片、銭貨、シジミやハマグリの貝殻等が出土しています。



石組み水路（南東より）

## （4）今後の課題

この度の甲府城下町遺跡の発掘調査では、狭小地（33.7m<sup>2</sup>）ではありますが、多くの遺構や遺物が発見され、甲府城下町における町屋のようすが見て取れました。水場造構においては他に類を見ないもので、十分にその性格等を把握できたとは言えません。今、私たちが暮らしている土地の地下には、まだまだ良好な状態で甲府城下町の痕跡が眠っています。引き続き甲府城下町の研究が進められ、甲府城下町の姿がさらに明らかになることを願います。

## 序 文

本書は、甲府市中央二丁目12-19に所在する甲府城下町遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は(都)古府中環状浅原橋線改築事業にかかる道路改良工事に伴い、工事予定地約33.7m<sup>2</sup>の範囲を対象に平成27年5月25日～6月26日にかけて実施しました。

今回報告する甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）は、甲府城の南東に展開する職人や商人が集住した地域に当たります。調査地点の南側には、甲斐国の陸上流通を担った甲州街道が通り、西側には近世以降宿場町「柳町宿」として栄えた柳町通りが通っています。このことから、この場所には甲州街道を通じて、当時の甲斐国を中心とする甲府城を目指してやってくるたくさんの人々や物資であふれていたことが想像できます。

平成23年には、本書で報告する調査地点がある交差点の西側対面の発掘調査が行われています。その調査では、江戸時代初期の生活面から地面に設置された石製の炉が見つかり、その炉の中から金が付着したふいご羽口（炉に空気を送る送風機の一部）が出土しています。そのほか、金が付着した土製の皿などが出土しており、中世以降の甲斐国の経済を支えた「甲州金」の精錬を解明する糸口を見出す発見となりました。

さて、今回の発掘調査では、江戸時代初期から近代にかけての遺構や遺物が数多く見つかりました。江戸時代初期の遺構面からは、東西方向に並ぶ礎石やその建物内に構築された土間やカマドが見つかり、当時の町屋構造を一部把握することができました。江戸時代中期の遺構面では、石と板や杭で構築された水溜状の遺構が見つかりました。この遺構からは、大量の木製品や石製品が出土しており、そのうち、木製の櫛が150点以上出土したことは、宿場町「柳町宿」のようすや人々の暮らしを生きしく再現する良好な資料群となることと期待しています。さらに、この水溜状の遺構を通じて、甲府城下町の水に対する施設や構造について、地形や地質条件とそこに暮らす人々の生活の工夫について考えさせられる調査成果となりました。

甲府城下町遺跡の埋蔵文化財をはじめとする文化財調査は、甲府市街地の整備工事に伴い継続的に実施されていくことが想定されます。現在の甲府が甲府城下町の形成とともに整備されてから連綿と続く都市であり、そこに根付く都市構造の歴史や技術の継承について考える必要があります。今後の調査研究の進展とともに、近世甲府の歴史を考えるうえで、本報告書が多くの方々にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に当たってご指導・ご協力いただいた関係者、関係機関に厚く御礼を申し上げます。

2016年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 出月洋文



## 例　言

1 本書は山梨県甲府市中央二丁目12-19に所在する甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）の発掘調査報告書である。

2 調査は（都）古府中環状浅原橋線改築事業に伴う事前調査であり、山梨県県土整備部より山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。

3 発掘調査にあたった組織は次の通りである。

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当　調査研究課調査第二担当　御山亮済（文化財主事）・上野桜（非常勤嘱託職員）

4 発掘調査期間及び整理作業期間は以下の通りである。

発掘調査　平成27年5月25日～平成27年6月26日

整理作業　平成27年7月1日～平成28年3月15日

5 本書の執筆・編集は御山及び上野が行った。なお、出土骨・貝の同定は調査第三担当塙谷風季が行い、報告原稿は第4章に掲載した。但し、遺構番号や表現の統一のため、御山が加筆修正を行った。文責は御山にある。

6 遺構写真・調査風景写真及び報告書掲載遺物は御山・上野が撮影した。

7 発掘調査における世界測地系座標に基づく基準点・水準点は、現地既存のデータを取得し利用した。

8 本報告に関わる記録図面・写真・出土遺物等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

9 発掘調査及び整理作業においては、次の方々・機関にご協力、ご教示を賜った。記して謝意を表す次第である（順不同、敬称略）。

堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）、望月祐仁・志村憲一・佐々木満・平塚洋一（甲府市教育委員会）、望月秀和（公益財団法人山梨文化財研究所）、辻川哲郎・小林祐季（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）、垣内律子、佐野香織、渡辺麗子、新津健、西海真紀

発掘作業及び整理作業参加者は以下の通りである。

発掘作業員　新谷博朋、菅沼芳治

整理作業員　平川涼子

## 凡 例

- 1 調査区は世界測地系座標によって設定しており、全体図中におけるグリッド名と別に付した数値は座標線の数値である。よって南北のグリッド線及び図中の北印は真北を示す。
- 2 本書への掲載にあたり、遺構の表記には略号等を用いず、遺構種別と検出順に付した数字にて表した。
- 3 本書に掲載した遺構及び遺物の縮尺は原則以下の通りであるが、遺構の規模や遺物の大きさによって縮尺を変更した箇所がある。そのためすべての図版中にスケールを示し、対応する番号を明記した。  
〔遺構〕 1／50, 1／30, 1／20  
〔遺物〕 陶磁器・土器：1／3、1／6 木製品：1／3、1／6 石製品：1／2、1／4、1／6  
 鉄製品・銭貨：1／3、2／3
- 4 本調査における遺跡の略号は、同一街路改築事業に伴う平成23年度発掘調査の継続であることから、平成23年度調査の略号を継承して枝番を付した、「KJ411-II」とした。
- 5 遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は標高を示す。
- 6 遺構挿図中に用いたスクリーントーンは遺物を示す。また遺物のドットは●が陶磁器、○が木製品、△が金属製品、■が石製品、▲が古銭、□が骨・貝、☆がガラス製品を示し、番号はそれぞれ遺物番号と対応している。
- 7 木製品遺物の挿図中に用いたスクリーントーンは朱漆・黒漆・炭化等を示す。スクリーントーンの指示はすべての図版中に記した。
- 8 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」1990年度版による。
- 9 遺物の計測方法については、『新宿区内藤町遺跡』及び『図説江戸考古学研究事典』を参考にした。

## 目 次

### 巻頭写真

序章 調査報告のあらまし

序文

例言

凡例

目次

### 第 1 章 調査の経緯・経過

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の目的と課題	1
第 3 節 調査の経過	1
第 4 節 調査に係る事務手続き	2

### 第 2 章 調査の経緯・経過

第 1 節 遺跡の位置と地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3

### 第 3 章 調査の方法と成果

第 1 節 発掘調査の方法	9
第 2 節 基本層序	9
第 3 節 発見された遺構と遺物	14

第 4 章 旧柳町一丁目地点より出土した動物遺存体	51
---------------------------	----

### 第 5 章 総 括

第 1 節 調査地点における土地造成の変遷	55
第 2 節 水場遺構01の構造と機能	56
第 3 節 柳町一丁目の土地利用－享和三年「柳町家持表口問数御改帳」を中心に	57
第 4 節 遺構の構築と地盤について	58

写真図版	59
------	----

## 挿 図 目 次

第 1 図 甲府城下町遺跡の周辺遺跡	5
第 2 図 甲府城下町旧街路・旧町名図及び主要調査地点	7
第 3 図 「NTT甲府支店西」交差点周辺の発掘調査区及び土層確認地点	10
第 4 図 調査区の土層堆積状況	11
第 5 図 第 1 期遺構面遺構全体図 (S = 1 / 80)	12

第6図	第2期遺構面遺構全体図 (S= 1 / 80)	12
第7図	第3期遺構面遺構全体図 (S= 1 / 80)	13
第8図	第1期遺構図 (礎石建物跡01)	22
第9図	第1期遺構図 (カマド01・土間01・第1期遺構外遺物分布図)	23
第10図	第2期遺構図 (水場遺構01)	24
第11図	第2期遺構図 (水場遺構01遺物分布図)	25
第12図	第2期遺構図 (水路01・土坑03・土坑04・落ち込み01)	26
第13図	第2期遺構図 (落ち込み02・木組遺構01・第2期遺構外遺物分布図)	27
第14図	第3期遺構図 (遺物集中01・石列01・石列02・石列03)	28
第15図	第3期遺構図 (溝01・溝02・土坑01・土坑02)	29
第16図	第3期遺構図 (礎石01・礎石02・礎石03・礎石04・水路02・焼土01・配石01・第3期遺物分布図)	30
第17図	陶磁器・土器出土遺物 (1)	31
第18図	陶磁器・土器出土遺物 (2)	32
第19図	陶磁器・土器出土遺物 (3)	33
第20図	陶磁器・土器出土遺物 (4)	34
第21図	陶磁器・土器出土遺物 (5)	35
第22図	陶磁器・土器出土遺物 (6)	36
第23図	陶磁器・土器出土遺物 (7)	37
第24図	陶磁器・土器出土遺物 (8)	38
第25図	木製品出土遺物 (1)	39
第26図	木製品出土遺物 (2)	40
第27図	木製品出土遺物 (3)	41
第28図	石製品出土遺物	42
第29図	金属製品・ガラス製品出土遺物	43
第30図	錢貨出土遺物 (1)	44
第31図	錢貨出土遺物 (2)	45
第32図	旧柳町一丁目地点の遺構・造成の変遷	55
第33図	旧柳町一丁目等区画計測図	57

## 表目次

第1表	甲府城下町遺跡の周辺遺跡一覧	6
第2表	甲府城下町遺跡の調査地点一覧	8
第3表	陶磁器・土器観察表	46
第4表	木製品観察表	47
第5表	石製品観察表	49
第6表	金属製品観察表	49
第7表	錢貨観察表	50
第8表	甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）出土貝・骨同定一覧	53
第9表	貝種別最小個体数一覧	54

# 第1章 調査の経緯・経過

## 第1節 調査に至る経緯

山梨県中北建設事務所都市整備課が行う都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴い、甲府市中央二丁目地内に所在する「NTT甲府支店西」交差点の拡幅が計画され、当該地は江戸時代、甲府城の南東の三の堀に囲まれた町人地であり、周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」に当たるため、保護措置が必要となった。

「NTT甲府支店西」交差点北西・南西部については、平成23（2011）年10月14日～11月14日に山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、調査の結果、甲府城下町に伴う江戸時代前半期を中心とした遺構・遺物が見られ、北西部の調査区からは江戸時代初期の金の精錬に係る遺構・遺物が発見された（平成25年3月刊行『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第288集 甲府城下町遺跡』）。

同交差点北東隅においては、本事業に先立ち、学術文化財課と中北建設事務所都市整備課、埋蔵文化財センターとの協議に基づき埋蔵文化財の有無確認をするため、平成26年6月4日に試掘確認調査を実施した。その結果、江戸時代の遺構を検出する等、現地表面下約70cmの深さにおいて江戸期の地形面が確認されたため、工事着手に先立ち記録保存のための発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査の目的と課題

本調査地点は、甲府城の南東、二の堀と三の堀に囲まれた町人地に所在する。南北に走る柳町通り（現遊亀通り）と東西方向に走る八日町通り（旧甲州街道、現城東通り）が交差する地点であり、この辺りは江戸時代甲斐国で最も栄えた場所とされている。調査では先の北西・南西部の調査区に引き続き、遺構・遺物の配置及び構造を正確に記録・保存し、それらの帰属時期及び変遷を明らかにしつつ、主要街道沿いの町屋の解明に努めた。

## 第3節 調査の経過

平成27年4月9日、本調査計画書を学術文化財課長へ提出（教埋文第24号 都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業及び甲府駅南口修景事業に関する調査計画書の提出について（依頼））した。この計画書を受けて、平成27年4月15日に「平成27年度（都）古府中環状浅原橋線改築事業（NTT西）に係わる甲府城下町遺跡調査に関する確認書」が山梨県県土整備部都市計画課と山梨県教育委員会学術文化財課で取り交わされ、同日学術文化財課長より埋蔵文化財センター所長に通知がされている（教学文第519号：（都）古府中環状浅原橋線改築事業（NTT西）に係わる甲府城下町遺跡発掘調査について（通知））。

発掘調査に先立ち平成27年4月14日に、学術文化財課・宏和建設株式会社（施工業者）・埋蔵文化財センターの3者にて現地協議を行い、現地の状態や工事工程の等を確認した。4月17日には県中北建設事務所・学術文化財課・宏和建設株式会社・埋蔵文化財センターの4者にて、現地協議を行い、調査日程、調査対象区域の東（前伊藤金物店前）の試掘等について確認をした。

17日の協議で試掘トレンチを入れなかった調査対象区域の東（前伊藤金物店前）において、発掘調査の効率を図るために試掘確認調査を行うことになり、4月24日に試掘調査を行い、昨年の試掘確認調査の結果と同様の土層を確認、江戸時代と思われる陶磁器が出土し、この地点も発掘調査を行うこととなった。

調査区内にあったコンクリート敷き及び擁壁については、発掘調査着手前5月23日に宏和建設株式会社が撤去をした。発掘調査は、平成27年5月25日～6月26日の期間で実働25日、作業員のべ41.5人を要した。

5月25日に調査区、作業ヤードを囲うガードフェンス設置を開始した。翌26日にはガードフェンスの設置を完了した。フェンスにはチューブライトを設置し夜間には点灯させる安全対策を取った。また、ブレハブ、簡易トイレを設置、重機を搬入した。作業ヤード内の排水渠置き場が狭小また搬出が困難であったため、調査区を東側と西側に分け、反転して調査を行うこととし、まず調査区東側について重機を用いて表土剥ぎを行い、同時に調査区東側の

北東隅について深掘りを実施した。その結果、3面の生活面を確認した。同日表土剥ぎ終了後、人力による掘削作業を開始した。その後第1面（第3期）、第2面（第2期）、第3面（第1期）と精査をしながら、適宜写真撮影や測量等の記録作業を行った。ベンチマークは事業用地内の既設の2点を利用した。また出土遺物は、それぞれ光波測距儀を用いて取り上げた。6月11日には現場にて学術文化財課、埋蔵文化財センター、甲府市教育委員会、公益財団法人帝京大学文化財研究所の職員による検出遺構や出土遺物について検討する現場検討会を行った。

6月12日に調査区東側の調査を終了し、同日埋め戻しを行い、引き続き、調査区の西側について重機を用いて表土剥ぎを行い、終了後人力による掘削作業を開始した。その後第1面（第3期）、第2面（第2期）、第3面（第1期）と精査をしながら、適宜写真撮影や測量等の記録作業を行った。ベンチマークは事業用地内の既設の2点を利用した。また出土遺物は、光波測距儀を用いて取り上げた。6月23日には現場にて埋蔵文化財センター、甲府市教育委員会、公益財団法人帝京大学文化財研究所の職員による現場検討会を行った。6月25日に調査を終了し、翌26日に埋め戻しを行った。また発掘機材等を撤収、ガードフェンス撤去、プレハブ、簡易トイレの撤去をして現場のすべての作業を完了した。

平成27年7月1日より平成28年3月15日までにおいて、遺物の洗浄、注記、接合、実測、拓本、製図、写真撮影、記録図面の整理をした後、原稿執筆、編集作業を行い、報告書を刊行した。

#### 第4節 調査に係る事務手続き

調査にあたり文化財保護法に基づく報告・通知の他、発掘調査の成果に係る報告を行った。それらの事務手続きは以下の通りである。

- ・ 平成27年4月8日付け 都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴う甲府城下町遺跡の調査計画書を学術文化財課長へ提出（教理文第24号：都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業及び甲府駅南口修景事業に関わる調査計画書の提出について）
- ・ 平成27年5月21日付け 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出し、甲府市教育委員会教育長への通知を依頼（教理文第132号：埋蔵文化財発掘調査の実施について（甲府城下町遺跡 古府中環状浅原橋線））
- ・ 平成27年7月1日付け 文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出し、甲府警察署長への通知を依頼（教理文第260号：埋蔵文化財の発見について（甲府城下町遺跡））
- ・ 平成27年7月14日付け 発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会教育長へ提出（教理文第297号：古府中環状浅原橋線街路事業に伴う甲府城下町遺跡発掘調査の終了について）
- ・ 平成28年3月末 発掘調査・整理作業の実績報告を山梨県教育委員会教育長へ提出（予定）



発掘作業風景



整理作業風景

## 第2章 調査の経緯・経過

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

本書にて報告する周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」は、山梨県の県庁所在地である甲府市に所在する。甲府市は、南端は県土中央に展開する甲府盆地南縁にて富士河口湖町と接し、北端は甲府市最高地点である金峰山にて長野県境となる。甲府盆地を南北に両断する長細い市域を持つ。調査地点が所在する甲府中心市街地は甲府市のほぼ中央かつ甲府盆地の北端部に位置し、北に要害山をはじめとする水ヶ森山地が発達して甲府盆地北縁の一角を構成する。水ヶ森山地と甲府盆地の境界では、秩父山塊へ続く太良ヶ岳より南流する相川が甲府市下積翠寺町付近を扇頂として相川扇状地を形成する。相川扇状地は東方を興因寺山(854.5m)、西方を北から順に要害山(787m)、大笠山(518.9m)、愛宕山(427.9m)に囲まれる。愛宕山の南西には、相川扇状地の形成とともに周囲が埋没することで形成されたとされる一条小山と呼ばれる独立丘陵がある。近世には一条小山の山体に甲府城が築かれたとともに、甲府城を中心に城下町が形成された。

甲府城下町は、一の堀に囲まれた「内城」と内城外縁から二の堀に囲繞された「内郭」、二の堀から三の堀に囲まれた「外郭」、三の堀外側の「郭外」から構成される。内郭には家老屋敷や御米蔵などの諸役所・倉庫・武家屋敷地、外郭には町人地・武家屋敷地、郭外には町人地・寺社地がそれぞれ置かれた。調査地点は内城南東の外郭、町人地に位置する。ここには内郭との境（西辺）に5ヶ所に見附が設置された。そして中は、南北の通り4本、東西の通り6本に区画され、豊富な町名が存在する。豊富な町名が存在する。

調査地点は標高約265mを測る。この場所は江戸時代、八日町通り・甲州街道と柳町通りが交差する交差点地点（北東隅）であった。現在の甲府においても城東通りと遊亀通りが交差する交差点（NTT甲府支店西）交差点（北東隅）となっている。対西には県埋蔵文化財センターが調査した「甲府城下町遺跡〔古府中環状浅原橋線〕」（第2表-63）がある。

地質としては、甲府市域は甲府深成岩体と呼ばれる花崗岩類や溶岩、凝灰角礫岩などの火山性堆積物により基盤をなす。甲府盆地は新生代の新第三紀末に隆起し、その一部を形成した。その後、水ヶ森火山岩・黒富士火砕流・韭崎岩屑流などの火成岩碎屑物が堆積する。また、市内全域に長野県御嶽山由来のPm-Iと呼ばれる御嶽第一軽石が堆積し、また、九州南部より始島Tn火成岩（AT）及びアカホヤ火成岩（Ah）の降灰も確認されている。甲府を特徴づける気候として、一年の気温年較差は激しい内陸性気候を示す。また、日照時間は全国的に比べても多く、比例するように降水量が少なく少雨区に属する。

### 第2節 歴史的環境 ※（ ）内の番号は第1図及び第1表中の番号に該当する。

**旧石器時代** これまでの甲府盆地における調査では、旧石器時代の居住地と考えられる遺跡は発見されていない。甲府市域においても同様であるが、八幡神社遺跡（93）においてナイフ形石器や切出形石器など4点の旧石器が見つかっている。ただし、剥片の出土は確認できず、剥片などを産出する拠点的な居住域ではないことが指摘されるが、この時代にヒトが立ち入る領域であったことは明らかである。

**縄文時代** 山梨県全において、縄文時代の遺跡数が多い。しかし、甲府市内においては対照的で少なく、相川扇状地域においては、緑ヶ丘二丁目遺跡（84）や大手下遺跡（88）、八幡神社遺跡などに限られる。ただし、甲府城下町遺跡のこれまでの発掘調査において、縄文時代に帰属する遺物が少量ながら発見されていることから、未だに発見されていない遺跡も存在するかもしれない。周辺地になると集落跡として、北原遺跡（14）、朝氣遺跡（15）、上石田遺跡（16）がある。

**弥生時代** 山梨県における遺跡数の傾向では、弥生時代になると遺跡数は減少する。甲府市域も例外ではなく、集落跡が塙部遺跡（13）や朝氣遺跡（15）で発見されるに留まり、遺跡の分布は極めて希少である。

**古墳時代** 甲府城下町遺跡内では、しばしば古墳時代に帰属する遺物が出土する。また、甲府裁判所地点において

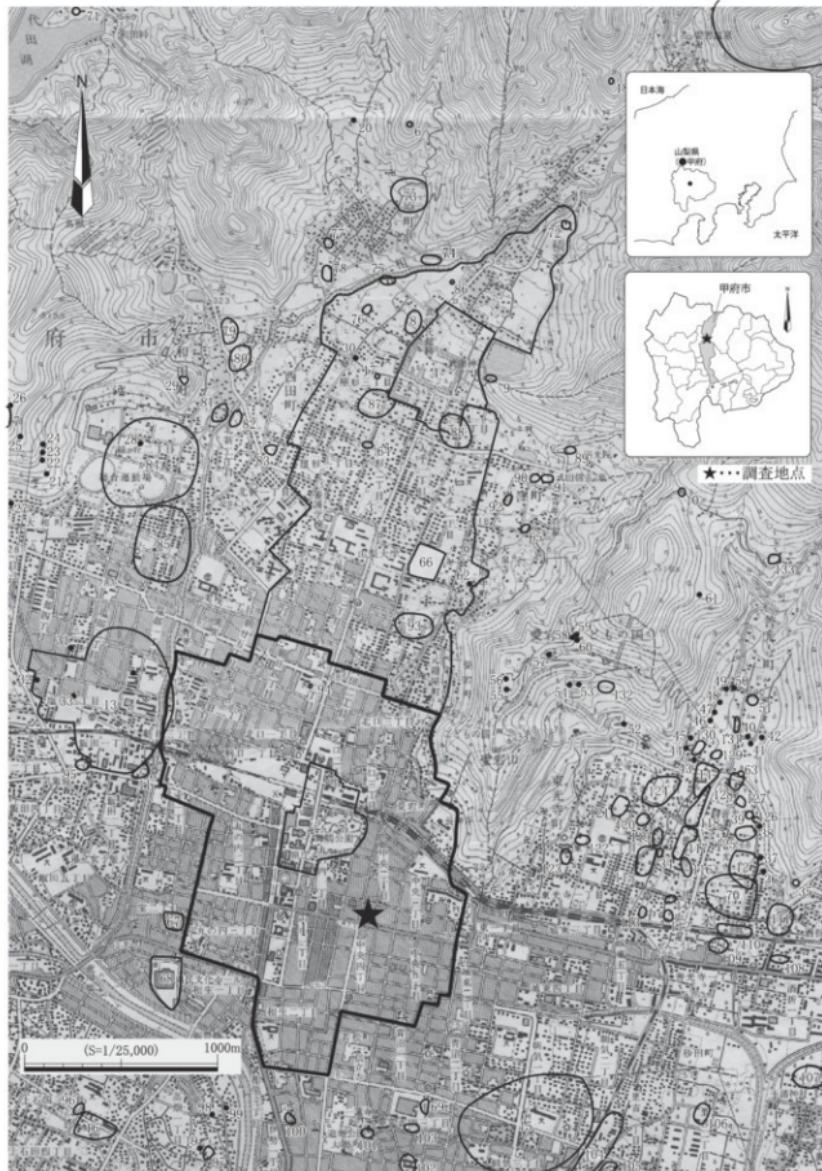
は、堅穴状遺構より弥生時代末～古墳時代前期の遺物が伴出している。甲府城下町遺跡で遺構を伴った城下町遺跡以前の遺跡が見つかるることは珍しい。周辺地域を見ると、甲府城下町遺跡の西に隣接する塙部遺跡においては、古墳時代前期の集落跡及び方形周溝墓群が発見されている。方形周溝墓からは古墳時代前期（4世紀後半）ウマの歯が出土しており、甲府盆地北部のこの地において当該期の一勢力を構成していたことが窺える。また、6世紀前半には甲府城下町遺跡の北西にある湯村山山麓に万寿森古墳（27）が築造されるほか、湯村山（21～26）、愛宕山（52～61）、善光寺周辺地域（34～51）に古墳や積石塚が築かれる。

**古代** 古代律令制下において、甲斐国では山梨郡・巨麻郡・八代郡・都留郡の4郡が置かれた。現在の甲府市域は、古代甲斐国では北東部に山梨郡表門郷、北西部に巨麻郡青沼郷、南部に八代郡白井郷の3郡にまたがる。甲府城下町遺跡周辺の遺跡では、古墳時代後半から平安時代の堅穴建物跡や溝、近世の墓塚などが検出された青沼遺跡（69）や弥生時代から平安時代にかけて形成された集落跡である朝氣遺跡が所在する。これらの遺跡は甲府城下町の南東に位置し、古代には巨麻郡青沼郷の一角をなしていたとされ、特に朝氣遺跡の大規模な集落跡は青沼郷の中心地と推定された。

**中世** 甲斐源氏の始祖である羅三郎義光の嫡男忠頼は、甲府城が築城される以前の一条小山及びその周辺に所在した一条郷を領して一条忠頼と称した。一条小山の名称は、忠頼がこの地に居館を置いたことに由来している。寿永三（1184）年、忠頼が源頼朝に誅殺されると、忠頼夫人により菩提の尼寺が建立される。正和元（1312）年には遊行二世他阿真教に帰依した一条時信により時宗寺院として改められ、名を福久山一蓮寺とした。16世紀前半には武田信虎により甲府の北方、鄒陽ヶ崎の地に館が築かれ、信虎・信玄・勝頼の約60年間にわたり、武田城下町が整備され、町は発展した。

**近世（武田氏滅亡～甲府勤番期）** 天正十（1582）年に武田氏が滅亡して以降、甲斐国は織田信長の家臣である河尻秀隆の支配から始まり同年に本能寺にて信長が倒されると秀隆が一揆により倒され、徳川家康の家臣平岩親吉が支配するようになる。しかし、同18年に家康が関東へ移封されると、羽柴秀勝が甲斐国に置かれ、翌年には代わって豊臣秀吉の家臣である加藤光泰、同じく浅野長政へと甲斐国の支配者は目まぐるしく変化していった。甲府城は、天正十八（1590）年頃から秀吉の命令により関東の徳川家康を牽制する目的で羽柴秀勝、加藤光泰らによって築城が始まられ、浅野長政・幸長父子の頃（1600年頃）に完成をみたと言われている。甲府城が造られた一条小山にあつた一蓮寺は天正十九（1591）年頃には城下町の南方に移転され、他の寺院も城や城下町整備時に順次移動させられている。慶長五（1600）年の関ヶ原の戦い以降は、長政・幸長が紀伊国和歌山へ転封、再び家康の支配下となり、徳川義直（城代平岩親吉）、徳川忠長、徳川綱重・綱豊父子と、宝永元（1704）年まで徳川氏の一族の領主が続いた。慶長十二（1607）年には幕府の直轄地となり、武田十二騎が城番を務めるようになった。宝永元年、5代将軍綱吉の側用人である柳沢吉保が武州川越から15万石で入封し、翌宝永二年には甲府城の屋形曲輪・楽屋曲輪などの殿舎の造営と石垣の修築を行うとともに、武家地の不足に伴い城下町の再整備が行われた。調査地点は、甲府城の南東の外郭の町人地内、八日町通り・甲州街道（城東通り）と柳町通り（遊亀通り）が交差する北東隅の地点であり、甲府城下町で最も栄えた場所である。柳町には甲府柳宿があり宿場町として栄えていた。道を挟んで対面の地点の調査では石臼や金粒が付着したふいごの羽口、土器が出土し金の精錬に関わる資料も確認している。享保九（1724）年、柳沢吉里が大和郡山へ転封になると甲府は幕府直轄下となり、甲府城・甲府城下町の守備を目的に甲府勤番支配が設置され、幕末の慶応二（1866）年まで続いた。甲府城下は度々火災に見舞われており、享保十二（1727）年には、城内から出火した火災により柳沢時代に築かれた武家屋敷や櫓などの城内建築物の多くは焼失した。また、甲府城下最大の大火と言われる享和三（1803）年の大火では柳町2丁目より出火、下府中19町、類焼家屋1,964軒・被災者6,732人に及んでいる。甲府城は、明治元（1868）年まで甲府城代が支配して明治維新を迎えていた。

**近代（明治～昭和）** 明治六（1873）年の廢城令により甲府城は内城のみが残されることとなり、明治10年前後には城内の主要な建物はほとんどが取り壊された。その後、明治三六（1903）年の甲府駅中央線の開通に伴い屋形曲輪、清水曲輪が解体され、昭和30年代まで堀の埋め立てや石垣の解体が行われた。甲府城、甲府城下町の跡には次第に新しい市街地が造られていった。しかし、昭和20年7月6・7日の空襲により甲府市街地の約74%が焼き尽され、城下町の様相はほぼ失われてしまった。



第1図 甲府城下町遺跡の周辺遺跡

※図中の番号は第1表に対応

第1表 甲府城下町遺跡の周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	城郭跡
2	甲府城跡	近世	城郭跡
3	武田城下町遺跡	中世	城郭跡
4	武田城下町遺跡	中世	城郭跡
5	要害城跡	中世	城郭跡
6	諏訪堂山遺跡	中世	城郭跡
7	湯村山城跡	中世	城郭跡
8	土居城跡	中世	城郭跡
9	西郷ヶ崎亭跡	中世	城郭跡
10	茶屋桂丸台	中世	城郭跡
11	横田氏居敷跡	中世	城郭跡
12	板谷氏居敷跡	中世	城郭跡
13	堀尾遺跡	弥生～平安	集落跡
14	北原遺跡	縄文・平安	集落跡
15	朝氣遺跡	縄文・平安	集落跡
16	上石田遺跡	縄文	集落跡
17	峰山南A遺跡	中世	寺院跡
18	ノ森新塚遺跡群	中世	新塚
19	高斯寺跡	近世	新塚
20	伐石古墳	古墳	古墳
21	湯村山1号墳	古墳	古墳
22	湯村山2号墳	古墳	古墳
23	湯村山3号墳	古墳	古墳
24	湯村山4号墳	古墳	古墳
25	湯村山5号墳	古墳	古墳
26	湯村山6号墳	古墳	古墳
27	万葉森古墳	古墳	古墳
28	相田御名塚	古墳	古墳
29	二光寺山遺跡	古墳	古墳
30	お城さん古墳	古墳	古墳
31	早乙女塚古墳	古墳	古墳
32	鴨原古墳	古墳	古墳
33	荒神塚古墳	古墳	古墳
34	羽切原古墳	古墳	古墳
35	不老園塚古墳	古墳	古墳
36	ボンボコ塚	古墳	古墳
37	おお塚古墳	古墳	古墳
38	善光寺無名塚	古墳	古墳
39	善光寺無名塚	古墳	古墳
40	三日月古墳	古墳	古墳
41	地藏塚古墳	古墳	古墳
42	鉢塚古墳	古墳	古墳
43	北原無名1号墳	古墳	古墳
44	北原無名3号墳	古墳	古墳
45	北原無名4号墳	古墳	古墳
46	北原無名5号墳	古墳	古墳
47	北原無名6号墳	古墳	古墳
48	北原無名7号墳	古墳	古墳
49	善光寺2号墳	古墳	古墳
50	善光寺1号墳	古墳	古墳
51	北善光寺遺跡	古墳	古墳
52	山形丘古墳	古墳	古墳
53	大空山3号墳	古墳	古墳
54	大空山2号墳	古墳	古墳
55	夢見山2号墳	古墳	古墳
56	夢見山1号墳	古墳	古墳
57	大空山1号墳	古墳	古墳
58	二ツ塚1号墳	古墳	古墳
59	二ツ塚2号墳	古墳	古墳
60	二ツ塚3号墳	古墳	古墳
61	一ツ塚古墳	古墳	古墳
62	コツ塚古墳	古墳	古墳
63	土上型空跡	奈良	瓦窯跡
64	長岡遺跡	中世	包蔵地
65	岩室遺跡	奈良～中世	包蔵地
66	山室大学遺跡	奈良・平安	包蔵地
67	宝町遺跡	縄文・平安	包蔵地

番号	遺跡名	時代	種別
68	寺町遺跡	縄文～近世	包蔵地
69	青沼遺跡	古墳	包蔵地
70	本郷遺跡	縄文・古墳～近世	包蔵地
71	丸山遺跡	縄文～古墳	散布地
72	日影田遺跡		散布地
73	山路遺跡		散布地
74	不動遺跡	近世	散布地
75	御馬屋山A路A遺跡	中世	散布地
76	御馬屋山B路B遺跡		散布地
77	西前田A遺跡	中世・近世	散布地
78	西前田B遺跡		散布地
79	十大遺跡	平安	散布地
80	永井遺跡	古墳・平安	散布地
81	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
82	向田A遺跡	弥生・古墳	散布地
83	向田B遺跡		散布地
84	緑ヶ丘・丁目遺跡	古墳～平安	散布地
85	緑ヶ丘・丁目遺跡	古墳	散布地
86	日影遺跡		散布地
87	峰本山B遺跡	近世	散布地
88	大手A遺跡	縄文	散布地
89	岩室C遺跡	古墳	散布地
90	中道東遺跡	近世	散布地
91	岩室A遺跡	近世	散布地
92	中道西遺跡	古墳	散布地
93	八幡神社遺跡	縄文	散布地
94	新星組小学校遺跡	近世	散布地
95	御田・丁目遺跡	弥生・古墳	散布地
96	上石田B遺跡	平安	散布地
97	宮北遺跡	縄文・平安	散布地
98	大北河遺跡	平安	散布地
99	久保北原原遺跡	平安	散布地
100	千松院遺跡	中世	散布地
101	太田町A遺跡	古墳～近世	散布地
102	湯田・丁目遺跡	古墳	散布地
103	青沼・丁目遺跡	中世・近世	散布地
104	里吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
105	家之面遺跡	平安	散布地
106	中坪遺跡	古墳	散布地
107	大橋遺跡	中世	散布地
108	内林遺跡	近世	散布地
109	本郷C遺跡	古墳～中世	散布地
110	本郷D遺跡	平安～近世	散布地
111	酒所鍬C遺跡	縄文	散布地
112	宮の前遺跡	縄文	散布地
113	東光寺遺跡	平安～近世	散布地
114	説教遺跡	平安～近世	散布地
115	御古之間遺跡	平安～近世	散布地
116	上郷遺跡	平安～近世	散布地
117	宮の脇B遺跡	縄文・平安	散布地
118	宮の脇A遺跡	縄文・平安	散布地
119	宮舊遺跡	平安～近世	散布地
120	六天大寺遺跡	平安～近世	散布地
121	亥ノ兔遺跡	縄文・古墳・平安～近世	散布地
122	六反田遺跡	平安～近世	散布地
123	御崎山遺跡	平安	散布地
124	地蔵北遺跡	古墳～平安	散布地
125	殿星遺跡	平安～近世	散布地
126	南善光寺遺跡	平安～近世	散布地
127	南善光寺B遺跡	古墳～平安	散布地
128	善光寺C遺跡	縄文・平安	散布地
129	堤下A遺跡	平安～近世	散布地
130	堤下B遺跡	平安～近世	散布地
131	北善光寺A遺跡	平安～近世	散布地
132	大笠山木の元遺跡	古墳	散布地
133	茶室遺跡	平安	散布地



S=1/10,000  
第2図 甲府城下町旧街路・旧町名図及び主要調査地点

※図中の番号は第2表に対応

第2表 甲府城下町遺跡の調査地点一覧

番号	遺跡名
★	甲府城下町遺跡（旧梅町一丁目地点）
1	甲府城三の堀跡
2	甲府城下町遺跡（武田二丁目10~100地点）
3	甲府城下町遺跡（新組屋小学校校庭地点）
4	甲府城下町遺跡（武田二丁目82~3）
5	甲府城下町遺跡（武田二丁目（いちやまート駐車場跡））
6	甲府城下町遺跡（朝日四丁目99他地点）
7	甲府城下町遺跡（北口二丁目50~1地点）
8	甲府城下町遺跡（北口二丁目17~18~21地点）
9	甲府城下町遺跡（北口二丁目12~1地点）
10	甲府城下町遺跡（桜シルク跡B区）
11	甲府城下町遺跡（北口二丁目（二の堀跡））
12	甲府城下町遺跡（北口二丁目14~9地点）
13	甲府城下町遺跡（桜シルク跡A区）
14	甲府城下町遺跡（日向町遺跡第1地点）
15	甲府城下町遺跡（武田恩賜沿い）
16	甲府城下町遺跡（北口二丁目（県立図書館建設地点））
17	甲府城下町遺跡（日向町遺跡第2地点）
18	甲府城下町遺跡（北口二丁目94地点）
19	甲府城下町遺跡（裁田氏屋敷跡）
20	甲府城下町遺跡（北口三丁目101（納戸）小路武家屋敷跡）
21	甲府城跡（清水曲輪）
22	甲府城（30街区）
23	甲府城星形曲輪（駐輪場）
24	甲府城星形曲輪（駐車場）
25	県史跡甲府城跡
26	甲府城（県庁前ローフン地点）
27	甲府城跡（柳樹門跡）
28	甲府城跡（道手門）
29	甲府城下町遺跡（道手門）
30	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目13（市道））
31	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目13~9地点）
32	甲府城下町遺跡（朝日二丁目214）
33	甲府城下町遺跡（横沢川）
34	甲府城三の堀跡
35	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目8~8地点）
36	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目2~3他地点）
37	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目（裏先手小路跡））
38	甲府城下町遺跡（B西区）
39	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目1~3地点）
40	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目183地点）
41	甲府城下町遺跡（43街区（労働局地点））
42	甲府城下町遺跡（B区）
43	北口一丁目1~5（山手御役七跡）
44	甲府城下町遺跡（A区）
45	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目109地点）

番号	遺跡名
46	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目31~9地点）
47	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目3地点）
48	甲府城下町遺跡（舞鶴小学校）
49	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目623（百石町武家屋敷跡））
50	甲府城下町遺跡（甲府地方裁判所地点）
51	甲府城下町遺跡（樂会所地点）
52	甲府城下町遺跡（紅梅地区内開発）
53	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目505~1他地点）
54	甲府城下町遺跡（中央一丁目115他地点）
55	甲府城下町遺跡（相生二丁目4地点）
56	甲府城下町遺跡（城東二丁目9）
57	甲府城下町遺跡（舞鶴城公園西通り西区）
58	甲府城下町遺跡（舞鶴城公園西通り線北・南区）
59	甲府城下町遺跡（土地開発整理事業17街区）
60	甲府城下町遺跡（上地区西通り整理事業43街区）
61	甲府城下町遺跡（甲府市行合建設地点）
62	甲府城下町遺跡（甲府法務局建設地点）
63	甲府城下町遺跡（古府中環状浅原橋梁）
64	甲府城下町遺跡（北口二丁目1~8~1~9地点）
65	甲府城下町遺跡（駒前駐輪場地点）
A	家老畠田五郎右衛門屋敷
B	山手御役宅
C	家老柳沢權太夫屋敷
D	道手御役宅
E	家老澁田平左衛門屋敷
F	御菴園
G	家老鈴木本水屋敷
H	城代柳沢隼人屋敷
I	黙典館
J	普請方定小屋
K	馬場
L	御米藏
M	御供長屋
N	御目付屋敷
O	御組屋敷
P	御樹木屋敷
Q	歎音院
R	金座
S	町牛寄坂田家
T	本陣
U	問屋
V	町牛寄山本家
W	若松庫
X	家老近藤図書屋敷

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 発掘調査の方法

**発掘区の設定** 調査区は事業用地内における試掘調査の成果を基に、調査区に隣接する住民の通行路の確保及び周囲の構造物に影響がない範囲で最大限設定した。調査は試掘調査にて得られた遺構包含層のレベルまで重機を用いて掘削した。調査区が狭小であったため、発掘調査にあたりグリッドは設定していない。第5～7図の遺構全体図に記したグリッドは、事業用地内の既設2点に与えられた座標データを基に整理段階で付したものである。なお、グリッドは東西方向に西から順にA・B・C・・・、南北方向に南から1・2・3・・・の記号を与え、その交差する区画をA-1区のようにグリッド名を付した。調査区域の東西の最大範囲を要するグリッドの座標値はY=6,574m（西端）・Y=6,585m（東端）。南北の最大範囲を要するグリッドの座標値はX=-37,622m（北端）・X=-37,630m（南端）である。調査にあたり排土の場外搬出は困難であり、排土置き場を事業用地内に確保しながら調査を実施するため、調査区を東西に二分して調査することとした。東区の調査が終了した段階で埋め戻して、引き続き西区の調査に移行した。

**発掘作業** 発掘調査では表土を0.1mの重機を用いて遺物包含層上面まで掘削し、人力にて遺物包含層を掘削して遺構の精査を実施した。確認した遺構は図化・写真撮影等記録作業を行いながら掘削し、必要に応じて遺構の半裁を行い、土層を観察したのち完掘した。出土遺物については、破片が大きなもの、完形に近いもの、検出比率が稀なものについては光波測距儀を用いてドットを落としたのち取り上げ、それ以外のものは遺構確認面毎に区別して一括して取り上げた。

**写真撮影** 全景写真は調査区内の高いところより鳥瞰写真を撮影したほか、地理的景観における立地を表現することを目的として、調査区域周辺の俯瞰写真を撮影した。部分写真は遺構や遺物の形成や埋没状況がよくわかる状態で写真を撮影し、その他、遺構を特徴づける状態であれば前述以外にも写真撮影を実施した。なお、遺構・遺物の写真撮影にはデジタルカメラ及びデジタル一眼レフカメラを使用した。

### 第2節 基本層序

発掘調査では、調査区北壁・東壁・南壁において土層の堆積状況を確認した。調査区内において北壁25層、東壁6層、南壁17層の土層が確認された。これらの細分層は、I～V層に大別できる。以下に、個々の大別層について概説する。なお、基本層序の確認は安定的に土層の観察ができる調査区東壁を中心として行っており、南壁及び北壁の土層の観察により構築された遺構や掘り込んでいる土層を検討した。本調査においては遺構の密度が非常に高く、南壁と北壁において十分な土層の検討ができなかった。

I層：黒褐色土を主体とする表土層である（東壁1層、南壁1層、北壁5層）。I層は調査区東側で厚く堆積しており、最大厚0.6mを測る。近代～現代の盛土層で、こぶし大の礫やコンクリート片、ガラスや近現代の陶磁器類を含む層である。調査区西側では、表土剥ぎに先立つコンクリート路盤の撤去に伴い除去されていたため、確認できなかつた。

II層：暗褐色土を主体とする土層である（東壁2層、南壁2・3層、北壁7・8層）。II層直上では、調査区の一部において、甲府空襲に由来すると思われる焼土層の堆積を確認した。II層上には水路02が構築される。また、II層中では、遺物集中01が確認された。II層上は近代。II層は江戸時代第3期の遺物を包含する層である。

III層：黒褐色～褐色の粘質土を主体とする土層である（東壁3層、南壁9層、北壁9・10層）。焼土を多く含む土層である。III層上を第3期遺構確認面とした。土中に焼土を粒状に含む層で、炭化物も混じる。火災などの影響を強く受けている生活面であり、検出遺構や遺物も被熱の痕跡が残るものが大多数を占める。

IV層：暗青灰色～暗褐色の土層を主体とする（東壁4・5層、南壁10層、北壁19・20層）。東壁5層は暗青灰色の硬くしまった層で、生活面を形成する。なお、本組遺構01は第3期遺構確認面より掘り込まれているが、第2期遺



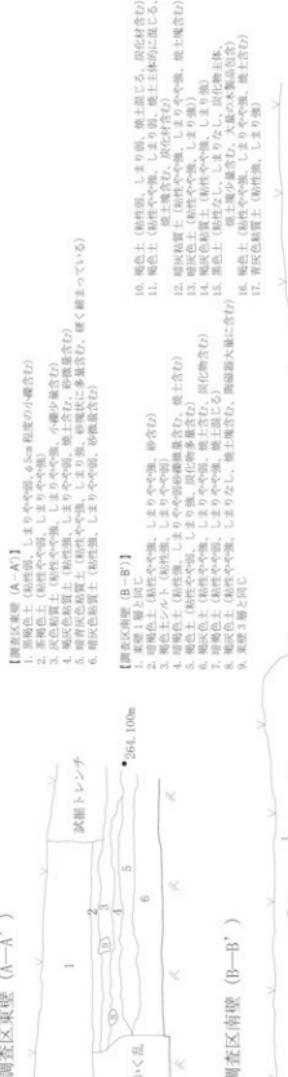
第3図 「NTT甲府支店西」交差点周辺の発掘調査区及び土層確認地点

構確認面において初めて確認できた。

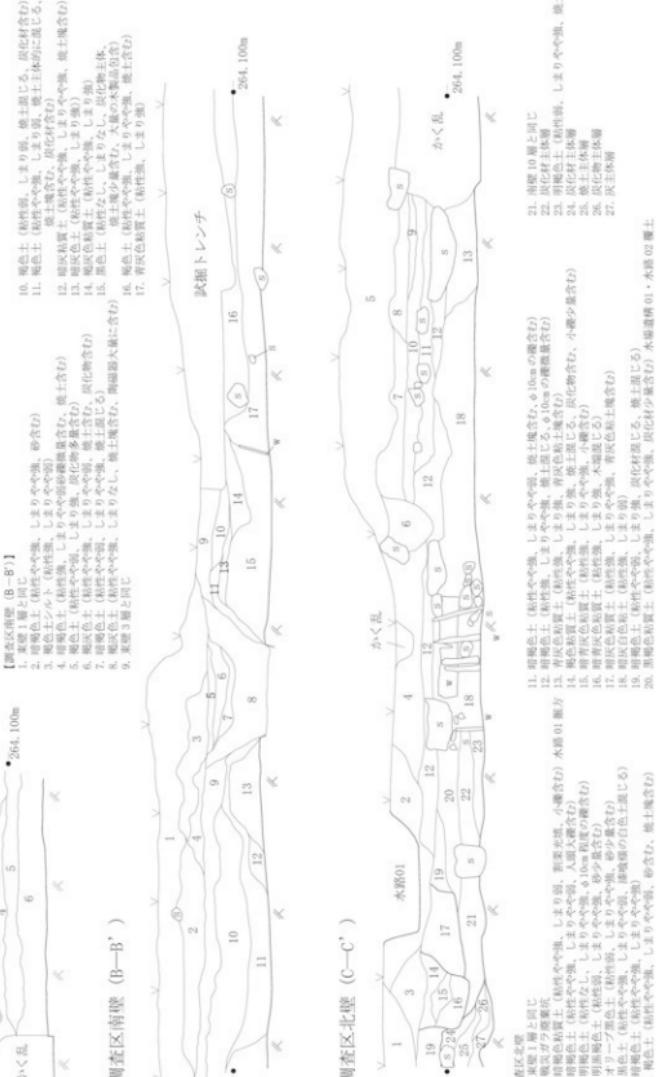
V層：暗褐色の粘質土を主体とする層である（東壁6層、南壁13・17層、北壁18・22・23層）。落ち込み01や水場遺構01が構築される土層である。第1期の遺物を包含する層である。第1期遺物包含層は、落ち込みや水場遺構01などの構築により広く削られている。

V層直下では地山となり、小躍が混じる黒色粘質土が堆積する。地山はよく硬くしまっており、第2・3期遺構確認面となるⅢ・Ⅳ層に比べて堅固な地盤である。そのため、第1期に構築された礎石建物跡の礎石には地業の痕跡はなく、地山に礎石を配しただけで沈下の痕跡も認められなかった。

### 調査区東壁 (A-A')

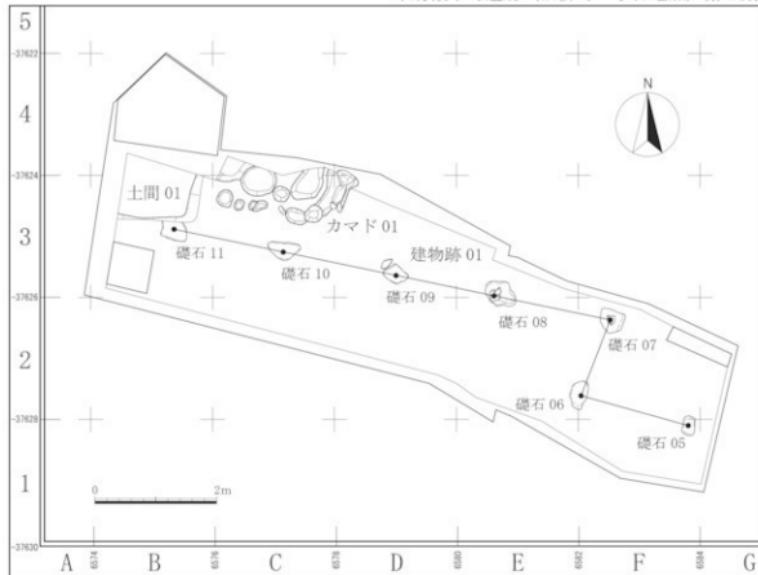


### 調査区南壁 (B-B')



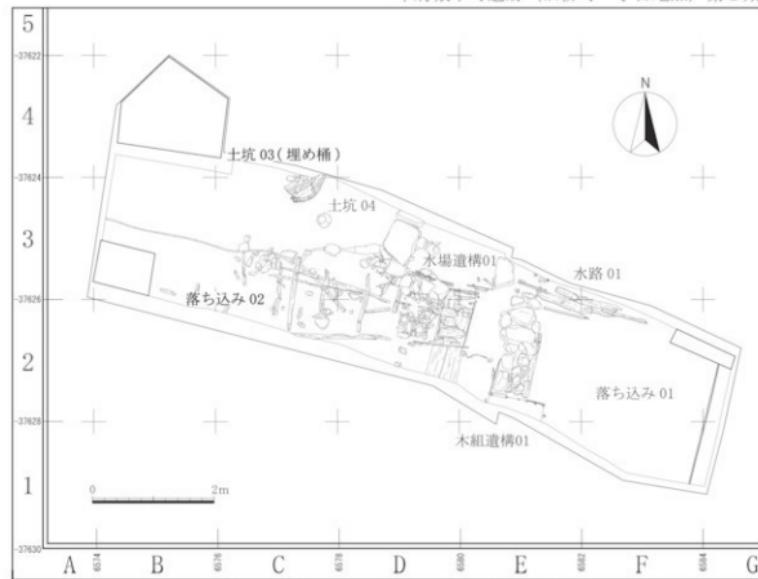
第4図 調査区の土層堆積状況

甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）第1期



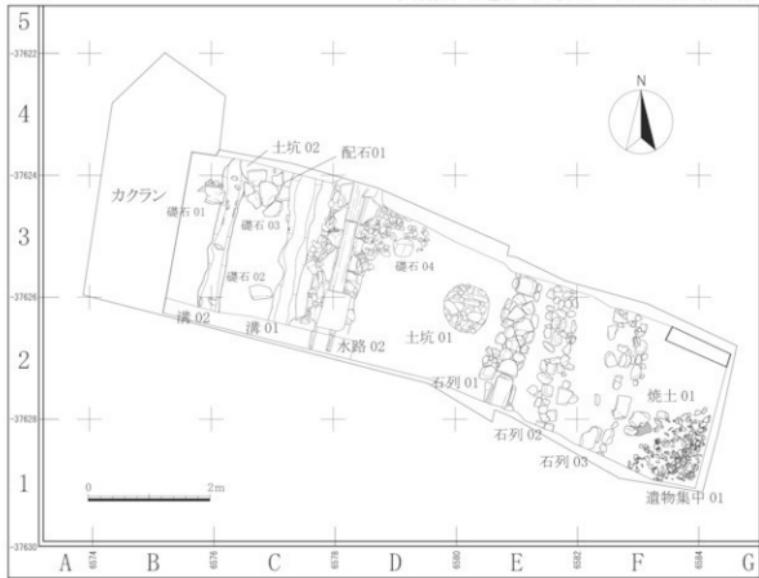
第5図 第1期遺構面 遺構全体図 ( $S = 1/80$ )

甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）第2期



第6図 第2期遺構面 遺構全体図 ( $S = 1/80$ )

甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）第3期



第7図 第3期遺構面 遺構全体図 ( $S = 1 / 80$ )

### 第3節 発見された遺構と遺物

甲府城下町跡（旧柳町一丁目地点）では、近世の遺構を3期の遺構面に分けて調査した。第1期遺構面では礎石建物跡1軒・カマド1基・土間1基、第2期遺構面では水場遺構1基・水路1条・土坑2基・落ち込み2基・木組遺構1基、第3期遺構面では遺物集中1ヶ所・石列3条・溝2条・水路1条・土坑2基・礎石4ヶ所・焼土1基・配石1基を検出した。

#### 第1項 第1期の遺構と遺物

##### （1）礎石建物跡01（第8図、第25図131・132）

**遺構概要** 調査区の西端から東端にかけて、礎石が等間隔に配列する。南北1.3m、東西9.0m。礎石の間隔は、各約1.8mであり、尺貫法における1間間隔に配置されている。礎石7から礎石6にかけては南側に鍵の手状に屈曲する。礎石上面のレベルや礎石の間隔が同様であることから、同じ建物に由来する礎石であると判断した。現在の国道411号（旧甲州道中）から礎石列の中心軸までの距離は約3.4mを測る。礎石7と礎石8の上には、柱材（131・132）が遺存していた。また、礎石7の上に配された柱材（131）には、石と柱の間隙を埋めるためと思われる薄板が挟まっていた。礎石下には地業の痕跡はなく、地山上に直接設置している。第1期遺構面から瓦は出土していないため、瓦葺きではないことが想定される。

**出土遺物** 木製品：礎石建物跡01は掘り込みなどを伴わないので、出土遺物はないが、構造材として柱材2点を報告する。131は一辯10.5cmの角柱。上部は端部より11.1cm遺存している。132は長辯12.0cm、短辯11.1cm、上部は端部より19.2cm遺存していた。132の表面には刃痕がみえる。

**帰属時期** 検出した遺構面より出土した遺物より、中世～江戸時代初期頃に帰属すると思われる。

##### （2）カマド01（第9図）

**遺構概要** 調査区北端部C-3区に位置する。カマド01の一部は調査区外北側にある。土坑02と土坑03（埋め桶）の構築と廃絶時の破壊行為により遺存状態は不良である。カマド下部構造の抽石の一部と同抜き取り穴が検出しており、その内部には焼土と炭化材、灰が堆積する。抽石は円形に2つ並ぶ形で配置していると推定でき、2つの焚口が存在したと考えられる。また、焚口は調査区外北側に向いている。

規模は、東西2m以上、南北1.1mを測り、個々の焚口の規模は東側焚口：東西1.1m、南北0.6m以上、西側焚口：東西1.0m、南北0.8m以上を測る。壁面の土層観察によるカマドの遺存高は遺構確認面より約40cmを測る。焚口の掘り込みは、遺構確認面より約6cmである。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**帰属時期** 級石建物跡01より検出した礎石列の北側に隣接した位置にあたり、カマドの構造は壁を背にした形で構築されている。後述する土間01との位置関係からしても、礎石建物跡01・カマド01・土間01は同一建造物に付属する構造であると判断した。中世～江戸時代初期頃か。

##### （3）土間01（第9図、第29図219、第30図242）

**遺構概要** 調査区西側B-3区に位置する硬化面であり、ここでは土間として報告する。青灰色の土を叩き締めながら構築しており、移植ゴテを用いても容易に削ることができないほど硬い。礎石建物跡01の礎石11が土間に半分ほど埋まっている。土間01の東端はカマド01まで続き、カマド01に向かって次第に低くなっていく。カマド01周辺に設けられた土間と判断した。

規模は東西1.3m以上、南北1.1m以上を測り、遺構確認面より約30cmの高さまで構築されている。

**出土遺物** 金属製品：土間の上面より金属製品（219・242）が出土した。219はキセルの吸い口。242は寛永通宝である。寛永通宝の初鑄年は寛永十三（1636）年であるので、少なくともこの時代まで機能していたことが想定される。

**帰属時期** 中世～江戸時代初期頃か

#### (4) 第1期遺構外出土遺物（第9図、第17図001～010、第25図133～135、第29図220）

陶磁器・土器：001は志戸呂焼の杯で内面のみ施釉される。年代は不明。002・003は瀬戸・美濃大窯の製品である。中世。004は18世紀前半～中頃の擂鉢。瀬戸・美濃で製作されたものである。条痕の遺存状況から未使用品に近いものである。005は中世に帰属すると思われる壺の頸部である。006はカワラケ。底部に「小」と思われる墨書きがある。007・008はカワラケ。009は火鉢類で火鉢か七輪であるが判別不能である。010は七輪のさなである。006～010はいずれも在地産の土師質土器である。第1期遺構面は、第2期の遺構による掘り込みが広くあり、ちょうど掘り込み底が第3期遺構面上にあたることから第2期と第1期の区別が困難であった。その中で、遺構面上にて検出した遺物を第3期遺構外一括資料として取り上げることとした。004は18世紀代の遺物であるが流れ込みであると考えられる。その他、時代の判別できた陶磁器類の年代より、第1期遺構面の年代は中世から江戸時代初期頃に比定される。甲府城築城期頃の土地利用に関わる重要な所見である。なお、第1期遺構面より検出した遺構は、遺物の出土が希薄であったが上間01より出土した寛永通宝の存在より、甲府城下町期には存在していた遺構であると判断した。

### 第2項 第2期の遺構と遺物

#### (1) 水場遺構01（第10図、第11図、第17図011～022、第25～29図136～193、195～216、221～225）

**遺構概要** 調査区中央部D・E-2・3区に位置する。東西3.0m、南北2.2mを測る。東側は南北に直線的に配列する石列により区画される。東側石列を構成する石の下には2枚の板が敷設されており（第10図 東側石列下層）、沈下を防止する役割があったと思われる。さらに板の下には一部石が配されていた（第10図 東側石列最下層）。一方、遺構西側の境界は、50～80cm角程の巨石を配して鍵の手状に屈曲させる。南側には拳大の石を配して石壘状に配する。西側石列の下には沈下を防止するための構造は存在しない。水場遺構01の範囲はこの2列の石列により区画された内部を示す。水場遺構01内には材木で設けられた垣が2ヶ所存在する。南側より垣01・02として、垣で区画された範囲を南側より区画01・02・03と呼称した。

（区画01）区画01は矢板を打ち込んで開廻した区画である。矢板の補強材として、一定間隔で約4cm角の角杭が打たれている。区画01内には炭化物を多く含む黒色の粘質土が充填されており、その中から木製品を主体として陶磁器や石製品、金属製品などが大量に出土した。区画01の底には、厚さ2cm程の板が2枚敷設されており、区画02の底まで同じ板が延長する。区画01の規模は東西1.5m、南北0.5m以上、深さ0.15mを測る。

（区画02）区画02は区画01の矢板に対して、横板により開廻する。底板と同じ幅に横板を配して区画しているため、区画01より狭い。規模は東西0.5m、南北0.9m、深さ0.2mを測る。区画01・03のような水溜め構造ではなく、区画01から03（またはその逆）への導水を目的とする区画であると考えられる。

（区画03）区画03は配石にて区画されるが、区画内に横板と杭で設けられた土留め構造がある。底板はない。区画01・02より深く、地山直上まで掘り込んでいる。透水性の低い地山であるため、底板の敷設は不要であったのだろう。区画03の北側壁面には土留め材と上面が平坦な石が見えていたため、区画03の範囲が確定した。区画03の規模は東西1.4m、南北0.8m、深さ0.6mを測る。

#### 出土遺物（区画01）

陶磁器：011・012は磁器製の猪口。器面にコンニャク判と手描きによる染付がある。1680年代の肥前に比定される。013～015は肥前の坏で17世紀末頃の所産である。いずれも被熱が激しく、器面が爆ぜている。016は瀬戸・美濃産の皿で底部に輪ドチの痕跡がある。017は肥前内野山窯の型打ちの製品である。破片資料のため確認できないが蛇の目釉剥ぎであろう。激しく被熱しており、銅錆釉が赤色に変色している。17世紀後半の所産。

木製品：136・137は合子蓋か。136は上部に孔があり、その周辺と口縁端部に同心円状の条痕が施される。137は輪切りにした丸太を素材として成形したものである。138は容器の底部。137と同様に輪切りの丸太材を用いて成形されており、底部には低い高台が作り出されている。139・140は容器蓋。下部に容器の受けとなる突出部がある。

140は漆塗りで、花弁状の文様が浮かび上がる。136～140はいずれも楕円による挽物である。141は黒漆が施された木製の杯台である。断面形状は楕円形を呈する。142は曲物の底板。143は円盤状木製品であり、中央に一列に並ぶ孔と端部に近いところに孔が設けられる。用途不明。144は曲物の底板である。底板に三脚が付き、周間に薄い板があがぐる。薄板は木釘により留められている。底板上面と脚部に漆が施される。145～147は将棋の駒。145は表に「飛車」と書かれるが、裏面の墨書は判読不能。146・147は「角行」。146は裏面に「龍馬」と書かれるが、147は判読不能。148は算盤珠。149～160は木製櫛である。区画01からは木製櫛が破片数にして159点出土した。ほとんどが横櫛であるが、全体の5%ほどに160のような豎櫛が存在する。また、横櫛はほぼ生地の状態であるが、159のみ棟と親歯に黒漆、櫛歯に赤漆が施されており、棟部に打出の小槌とシルクハット状の蒼蛇が施されている。また、裏にも蒼蛇が施されるが判別不能。161・162は長方形の薄板である。163は表面に加工が施された木片である。表面には加工に使用された工具の歯幅が推定できる刃端痕が残る。164・165は断面台形の部材で、165は中心からはずれたところにホゾ孔が設けられる。164・165ともに裏面には木釘が打たれた痕跡がある。166は底部にホゾが設けられた部材である。端部には刻みが施される。161～166はいずれも用途不明。

石製品：195～202は粘板岩製の硯。195～200の6点には裏面に「高嶋本青石」と刻される。石材は滋賀県高島市付近より産出する高島石である。江戸時代を通じて硯の素材として産出し、広範囲に流通していた（註1）。ただし、江戸城下における高島石製の硯の検出比率に比べると、ここでの出土量は多いという（註2）。203～216は碁石。これらのうち208～211は貝製の白色碁石である。図版の煩雑さを避けるためここに掲載した。

金属製品：222はキセルの雁首。筒部は欠損している。223は金属の円形塊。材質は不明。221は銅板。221・223とも用途不明。

#### 出土遺物（区画02）

陶器：018は瀬戸・美濃産の志野皿。17世紀前葉に比定される。

木製品：167・168は曲物の底板。169は漆椀。黒漆地に鶴丸が赤漆で施される。170は曲物の側板。3枚の薄板を樹皮で留めている。

金属製品：224は犠先。先端は丸く、上部に向かってやや広がる形状を呈する。牛や馬に牽かせて用いる唐犠で、上面は平坦である。

#### 出土遺物（区画03）

陶器・土器：019は区画03の西側石列の間からほぼ完形で出土した柿釉灰釉流しの天目茶碗。瀬戸・美濃産で17世紀第2四半期頃の所産である。020は瀬戸・美濃産の上質な志野皿。17世紀初頭頃。表面には炭化物が全面に付着している。灯明皿として用いられたものか。021は在地産のカワラケ。17世紀前葉。

木製品：171～176は漆椀である。171・172は黒漆地に鶴丸が赤漆で描かれる。171に比べて172はやや小さい皿状を呈する。173は黒漆地。174は黒漆地に赤漆で文様が描かれる。175・176は赤漆地に黒漆で文様が描かれる。177は曲物の底板か。表裏面に漆が施される。178～193は木製箸。区画03からは大量の木製箸が出土した。

金属製品：225は銅製の立方体を呈する不明製品である。中心に孔が貫通している。

#### 出土遺物（水場遺構01一括）

陶器：022は瀬戸・美濃産の志野皿。17世紀前葉頃の所産である。

殻属時期 水場遺構より出土した陶磁器の年代より、区画01は17世紀末頃、区画02・03は17世紀前葉頃に比定でき、区画01と区画02・03で少なく見積もって半世紀の幅がある。それぞれの区画における出土遺物に流れ込みはなく、各々すべて一括資料である。西側石列の間より出土した天目茶碗（019）と区画03より出土した陶器類の時期を見ても、構築～機能した年代は17世紀前葉頃に比定できる。区画01より出土した陶器は、区画02・03とは異なり激しい熱を受けていることから、大火等に罹災した道具を投棄した一括資料と理解できる。なお、該期における大火は現状で確認されていない。水場遺構01が廃絶した後、埋没過程で区画01の部分を掘り起こして投棄したものであろうか。

#### (2) 水路01 (第12図、第27図194)

遺構概要 調査区北端部E・F-3区に位置する木組みの水路。水路北側を構成する部材は調査区北外にあり、確認できなかった。また、調査区北東隅のかく乱で破壊されており、水路の東端から先の状況は不明である。遺構の遺存状態は不良であり、側板が水路外側に傾いた状態で検出した。側板は水場遺構01区画03の土留め構造と同じく杭で押さえてある。水路底には厚さ0.2cm程の薄板が敷設されていた。

水路の西端は水場遺構01に接しているが、水場遺構01区画03への接続関係は各々の構造材が乱れていたため、発掘調査では明らかに出来なかった。

また、導水の方向も不明である。長さ1.5m以上、幅0.25m以上、深さ0.2mを測る。

出土遺物 194は下駄の鉢片である。遺存状態が悪く鼻緒の孔が未確認であるため左右の判別はできなかった。下駄歯は高く遺存している。

#### (3) 土坑03 (第12図、第17図023)

遺構概要 調査区北端部C-3区に位置し、一部調査区外にあたる埋め桶である。径0.6m、深さ0.4mを測る。土坑03（埋め桶）の西側半分は土坑02との切り合いで欠損している。埋め桶は底板と最大高約23cmの側板が遺存している。側板のうち1枚に木栓が付属している。

遺物概要 023は完形の小型カワラケ。在地での製品であろう。

帰属時期 不明。

#### (4) 土坑04 (第12図、第17図024)

遺構概要 調査区中央部C-3区に位置する。径0.3m、深さ0.36mを測る。遺物の出土状況より、柱穴ではないだろう。

出土遺物 陶器：024は京都・信楽系の碗。器面に錦絵が施される。見込みに3つの小さい目跡がある。18世紀中葉頃の所産である。

帰属時期 18世紀中葉頃か。

#### (5) 落ち込み01 (第12図、第18図025～039、第28図217)

遺構概要 調査区東端F-1・2区に位置する。南北2.2m以上、東西約2.0m、深さ0.5mを測る。落ち込みの南北端は調査区外となり確認できなかった。内部には被熱した陶磁器や石臼、炭化した木材などが投棄されている。落ち込み01の埋土には焼土が大量に混入しているため、大火後の焼土整理坑かもしれない。

出土遺物 陶磁器・土器類：025は肥前産のくらわんか碗。18世紀後半。026は瀬戸・美濃産の広東碗。18世紀末～19世紀初頭頃。027は肥前産の小丸碗で見込み部に五弁花がある。18世紀後半。028・029は小広東碗。1770～80年代の製作。030は肥前産の猪口。被熱している。18世紀後半。031は肥前産の白磁小丸碗。18世紀後葉～19世紀前葉。032は肥前産の伝飯器。19世紀前半～中頃。033は瀬戸・美濃産の奈良茶碗。器面に鉄軸と染付で描かれる。19世紀前葉。034は京焼の筆立。全体的に被熱しており、土壁が器面に付着している。18世紀後半の所産。035は瀬戸・美濃産の皿。17世紀前半。036は瀬戸・美濃産の擂鉢。大型で見込みに不規則な擂り目を施す。18世紀後半～19世紀前半頃に帰属する。037は在地産のカワラケ。038は土製の札。下部は欠損している。表に楷書体で「吉村…」と陽刻され、裏面の文字は判読不能。表面が木目状となっていることから、木型による型打ち成形であろう。039は土壁の破片である。内部に混和材の草本類が炭化した状態で確認できる。土壁事態も被熱していることから、建物が大火により倒壊したものの残りであろうか。

石製品：217は石臼。上面に条痕が若干残っている。上面にくぼみがあるのに加え、欠損している部分には孔があっていたようである。

帰属時期：出土した陶磁器の年代より18世紀後葉～19世紀前葉頃に比定される。このころ甲府城下町において起きた大火として該当するのは、享和三（1803）年の甲府大火がある。この大火では甲府城下44町が焼け、1964軒の家屋が罹災したという。この時代に比定される遺構であれば、甲府城下町における実年代を示す資料群となるが検討を要する。

#### (6) 落ち込み02（第13図）

**遺構概要** 調査区西南端B～D～2・3区に位置する。南北1.4m、東西5.2m、深さ0.15mを測る。形状は不整形で埋土はしまりなく軟弱である。落ち込み02内には材木が井桁状に配される。構造材には、枝材や丸太材のほかホゾ穴が開くものや角釘が打ちたれているものがある。それぞれの材木は緊縛や固定されておらず、検出したレベルも落ち込みの底からやや高い位置にあるため何らかの構造物ではない。上部に構築された構造物の沈下を抑止するための構造か。

**出土遺物** 出土遺物はなかった。

**帰属時期** 検出面の出土遺物の年代から、江戸時代中期頃に帰属すると思われる。

#### (7) 木組遺構01（第13図、第18～21図040～082）

**遺構概要** 調査区中央部E～2区に位置する。南北0.2m以上、東西0.9m、深さ0.4m以上を測る。水場遺構01の東側石列を切っている。径5cm程の丸木杭を約10cm間隔に打ち込みおよそ方形の区画を作り出すと思われる。南壁土層の観察より木組遺構01が機能している段階で火災があったようで、検出面より焼土が杭列内のくぼみに落ち込んでいるようすが見て取れる。また、杭の上端部がすべて炭化していたことも傍証となる。杭列の外側には横使いの板材で囲繞していたようであるが、遺存状態が悪く、一部でのみ確認できた。木組遺構01の底部には黒色の粘土が堆積している。木組遺構01が機能していた時期に堆積したものと考えられる。もともと備わっていた機能は下水の沈殿槽である芥溜かもしれない。埋没段階には、木組遺構01の中（4層）に大量の陶磁器が投棄されていた。

**出土遺物** 陶磁器：040は瀬戸・美濃産の広東碗。太白手で見込み部に五弁花の染付がある。18世紀末～19世紀前葉の所産。041は肥前産の小丸碗。042は京都・信楽系の小杉茶碗。18世紀末～19世紀初頭の所産である。043は瀬戸・美濃産の刷毛目碗。18世紀後葉。044・045は瀬戸・美濃産の猪口で19世紀代の所産である。046は小型のカワラケ様の陶器。産地・年代は不明。047は瀬戸・美濃産の壺蓋。近世の所産であるが詳細不明。048は灯明皿。19世紀前半～中頃。049は瀬戸・美濃産の御猪口。19世紀代。050は瀬戸・美濃産の輪禪皿。18世紀後半。051・052は瀬戸・美濃産の片口鉢。051は19世紀前半、052は18世紀末～幕末の所産である。053は瀬戸・美濃産の捏ね鉢。19世紀前半。054は堺産の鉢鉢。19世紀前半。055は京焼の火入れで器面の装飾が彩色豊かで上質なものである。18世紀末～19世紀前半。056は瀬戸・美濃産の香炉。18世紀後葉～19世紀前半。057は瀬戸・美濃産の火鉢。スタンプと貼り付けにより器面を装飾する。058は瀬戸産の水甕。底部付近の突出部に穿孔がある。木栓が付属していたと思われる。059・060は瀬戸産の火鉢。061は瀬戸・美濃産の火鉢。押し型による成形。勇右衛門窯より同様の器が出正在している。062は瀬戸産の蓋。押し型による成形で、欠損しているが上部に宝珠が付くものである。勇右衛門窯の製品か。057～062はすべて18世紀末～19世紀初頭の所産である。063は瀬戸・美濃産の植木鉢。18世紀末～19世紀初頭。064・065は瀬戸・美濃産の壺。064は18世紀後半～幕末、065は19世紀前半の所産である。066は丹波産の甕。19世紀中頃～後半。067は常滑産の甕。19世紀初頭。068は京都・信楽系と思われる六花瓶である。緑釉が架かっていたと思われるが、激しい被熱により釉薬がほとんど剥がれている。19世紀前半～中頃。069は瀬戸・美濃産の三耳壺。19世紀代。070は美濃産の一升徳利。19世紀前半。071は瀬戸・美濃産の肥前徳利の写し。19世紀代。072は瀬戸・美濃産の油徳利。18世紀代か。073は瀬戸産の汁注ぎ。蓋が付属するものである。18世紀後半～19世紀前半。074・075は鍋。074は小型で一人用のもの。075は非常に大きいもので、供膳用の鍋と思われる。いずれも京都・信楽系で19世紀前半～中頃の所産である。076は特大の土瓶で京都・信楽系の製品である。19世紀前半～中頃。077・078は灯明受皿。19世紀前半～中頃。077は瀬戸・美濃産、078は京都・信楽系の所産である。079は京都・信楽系の茶葉留め。19世紀後半。080・081・082は土師質の火鉢。19世紀代に在地で製作されたものと思われる。083は在地産の掘堀鍵部材である。年代不明。

**帰属時期** 木組遺構01が機能していた時期と認められる遺物が出土していないため、構築年代は明らかでない。投棄された出土陶磁器類の年代より、18世紀後半～19世紀前半頃に廃絶したものと考えられる。落ち込み01同様、出土した陶磁器のはほとんどが被熱しており、大火等の罹災が想定される。また、落ち込み01と同じ年代が想定される

ことから、同じ大火による整理の痕跡である可能性がある。

#### (8) 第2期遺構外出土遺物（第13図、第22図084～098、第29図227～232）

**出土遺物 陶磁器：**084は肥前産の磁器碗。18世紀末。085は肥前産型紙刷りの変形皿。18世紀前葉。086は肥前産の仏飯器。18世紀後半～19世紀頃。087は京都・信楽系の猪口。19世紀後半～明治頃。088は瀬戸・美濃産の杯。18世紀後半。089は瀬戸・美濃産の皿。底部に輪ドチの痕跡が残る。16世紀末。090は瀬戸・美濃産の志野皿。17世紀前葉の所産である。091は瀬戸・美濃産の皿。底部に輪ドチの痕跡がある。土岐窯ヶ根で製作されたものである。17世紀後半。092は堺産の擂鉢。18世紀第3四半期。093は瀬戸・美濃産の香炉。器面に半菊の施文がある。18世紀前半。094は瀬戸・美濃産の船徳利。19世紀代。095は瀬戸・美濃産の秉燭。18世紀後半～19世紀。096・097は在地産のカワラケ。098は七輪のさな。19世紀後半以降のものか。江戸遺跡では確認されていない形式のものである。

**金属製品：**227～230はキセルの雁首。227～229は表面に真鍮が施される。素材は銅とみられる。230は雁首先端部と装着部付近に条痕が施されている。231は銅製のキセル吸い口。232は頭巻釘。断面は四角。

### 第3項 第3期の遺構と遺物

#### (1) 遺物集中01（第14図、第22・23図099～104）

**遺構概要** 調査区南東隅F-1区に位置する。表土剥ぎで目標とした第1面（第3期遺構面）より高い位置で検出した。遺物が分布する範囲は南北13m以上、東西12m以上、遺物が分布する厚さは20cm程ある。平面及び壁面の観察においても掘り込みは確認できなかった。

**出土遺物** 099は肥前産の磁器皿。口唇部には鞘形文が施されるが、うまく発色しておらず潰れてしまっている。19世紀代の所産である。100は肥前産の仏飯器。器面に蛸唐草文が施される。19世紀前葉～中葉。101は瀬戸・美濃産の灯明皿。19世紀中～後半。102は瀬戸・美濃産の植木鉢。18世紀末～19世紀前半。103・104は瀬戸・美濃産の捏ね鉢。19世紀前半の所産。出土遺物の大多数は被熱している。

**帰属時期** 出土陶磁器の年代より幕末頃に投棄されたものである。ただし、出土遺物の中に明治期に帰属する遺物はない。

#### (2) 石列01（第14図、第23図105・106、第29図233～236）

**遺構概要** 調査区中央部E-2区に所在し、南北方向に軸を持つ。南北2.2m、東西0.6mで玉石を主体として構築されているが、最南で検出した石材は四角柱に成形されたものが使用されている。玉石の一部にはコンクリート片が付着しており、近代まで露出していた可能性がある。石列01は水場遺構01の東石列の直上に位置していることから、土地の区画を示す表示としての機能が考えられる。

**出土遺物** 105は肥前産の小丸碗。18世紀後葉。106は瀬戸・美濃産のお歯黒壺。器内に黒色の付着物がほぼ全面に付いている。18世紀末～19世紀代の所産である。

**金属製品：**233は円形銅製品。中心部がくぼんでいる。用途不明。234はキセル雁首。横からの圧力により平らに潰れている。故意に潰したものかは不明である。235は銅製の耳搔き。棒状で端部に杓子状の部位が付く。236は銅製の簪。一端は二股に分かれれる。もう一端は235同様耳搔きが付くものである。

**帰属時期** 石列01を構成する石の間隙より、完形の状態で出土した。石列01の構築時期に当たる遺物と考えられ、18世紀末以降に比定される。

#### (3) 石列02（第14図）

**遺構概要** 調査区中央やや東寄りE-2区に位置する。南北2.3m、東西0.6mで石列01に平行して構築されており、人頭大よりやや小さい玉石を主体として構成されるが石列01の構成縦より小さい。石列の南側の石材はやや乱されている。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**帰属時期** 不明。

（4）石列03（第14図、第23図107～112、第28図218）

**遺構概要** 調査区東側F-1・2区に位置する。石列01・02とは並列するが、軸はやや西に振れる。上面が平坦な石を配するが、配列はやや乱れている。抜き取られた可能性もある。縦上に陶磁器がほぼ完形の状態で遺存している。

**出土遺物** 107～110は肥前の小丸碗。18世紀後葉。111は広東碗。18世紀末頃の所産である。112は瀬戸・美濃産の搖鉢。18世紀中葉～後半。条痕の遺存度から使用品である。

**石製品** : 218は砥石。中央に擦痕がある。

**帰属時期** 出土した陶磁器の年代より18世紀後葉頃に帰属すると思われる。

（5）溝01（第15図、第23図113）

**遺構概要** 調査区西部C-3区に位置する。長さ2.4m、幅0.8m、深さ0.15mの素掘り溝。東側は一部水路02により切られている。

**出土遺物** 113は在地産のカワラケ。器内部に鉄分が厚く付着している。

**帰属時期** 不明

（6）溝02（第15図）

**遺構概要** 調査区西端に位置する。長さ2.4m、幅0.6m、深さ0.4mの素掘り溝。溝01に平行する。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**帰属時期** 不明

（7）土坑01（第15図、第23図114～116）

**遺構概要** 調査区中央部E-2区に位置する。径0.8m、深さ0.1mの円形を呈する。土坑にはレンガと平瓦が集積されている。レンガや平瓦の間には隙間があり、埋没過程にある。

**出土遺物** 114は瀬戸・美濃産の丸型の湯飲み碗。1820年以降の所産である。115は在地の植木鉢か。江戸遺跡では検出例はない。116は在地産の浅い燈籠。時期は不明。

**帰属時期** レンガの混入が見られるため、近代以降の所産と推定される。

（8）土坑02（第15図）

**遺構概要** 調査区中央部北端C-3区に位置する。径0.8m、深さ0.4mの円形を呈する。土坑03を切っており、構築段階で埋め桶の構造材を除去しながら掘り込んでいる。機能は不明。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**帰属時期** 不明

（9）礎石（第16図）

**遺構概要** 調査区中央～西部にかけて、時期不明の礎石が検出した。それぞれの礎石の間隔は不規則であり、ひとつの建物基礎をなすものではないと思われる。礎石04は主体となる礎石の下部にこぶし大の礎を敷設して根石としている。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**帰属時期** 不明

（10）焼土01（第16図）

**遺構概要** 調査区南東隅に位置する。検出面において、被熱して劣化した2石の礎が並び、その礎に挟まれて円形に焼土及び炭化材が薄く広がる。断ち割りによる断面観察では掘り込みは確認できなかった。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**帰属時期** 不明

（11）配石01（第16図）

**遺構概要** 調査区西部に位置する。溝01と02の間に位置し、土坑01の埋没後に形成されている。人頭大の礎を花卉

状に配置している。構築に当たり礎の上面を平坦にする意思は見受けられない。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

帰属時期 不明

(12) 水路02 (第16図、第29図241)

遺構概要 調査区中央部に位置する。長さ2.8m、石組み内幅0.2m、深さ0.25mの石組み水路である。掘り方規模は幅0.8mを測る。安山岩の間知石で構築される。水路02は埋没過程にあり、検出時には水路底から約10cmまでが埋没していた。検出した最南端部では溝蓋が架かっており検出した。調査区北壁にて水路の北側の続きを確認すると、溝蓋が戦前までのコンクリートに埋め殺されている様子が見て取れる。このことから調査区内で検出した石組み水路においても同様に溝蓋が架かっていたが、表土剥ぎに先立つコンクリートの除去に伴い、一緒に撤去されてしまったと考えられる。間知石の下部には丸太がすえられており、沈下を抑止する胴木と思われる。また、水路底には板材が敷設されている。雨天時には、調査区北側より南に向かって水が流れる。

出土遺物 241は水路02内より出土したガラス瓶。表に「軍中 目薬 健眼水」、裏に「皆春堂製」が見える。近代に帰属する。掘り方から遺物の出土は見られなかったため、構築年代は不明であるが、近代まで機能していたことがわかる。

帰属時期 水路内より出土したガラス瓶より、近代まで機能していたものと思われる。構築年代は不明。溝蓋を埋め殺したコンクリート盤の上には、甲府空襲に由来する焼土・灰などが堆積していることから、戦前にはすでに露出していなかった。

(13) 第3期遺構外出土遺物 (第16図、第24図117~130、第29図237~240)

陶磁器：117は肥前産の猪口。18世紀末～19世紀中葉の所産である。118は肥前産の油壺。18世紀後半。119は肥前産の朝顔形碗の蓋で青磁染付。広瀬窯で製作されたものである。18世紀後半。120は肥前産の合子蓋。18世紀後半。121は瀬戸・美濃産の灰釉碗。17世紀前半か。122は肥前産の青磁香炉。器内にアルミナが付着している。18世紀後半～19世紀前半。123は肥前産のミニチュア紅皿。19世紀代。124は肥前産の紅皿。19世紀前半。123・124はいずれも型作り。125は瀬戸・美濃産の灯明皿。江戸時代中期頃の所産。126は瀬戸・美濃産の灯明受け皿。19世紀前半～中葉。127は明石系の擂鉢。小型のもので擂鉢の検出比率では珍しいサイズのもの。19世紀中葉。128は瀬戸・美濃産の擂鉢。18世紀後半～19世紀初頭。129は瀬戸・美濃産の鍋。一人用の大きさである。19世紀前葉～中頃。130は瀬戸・美濃産と思われる陶器製の戸車。使用された痕跡は認められない。19世紀。

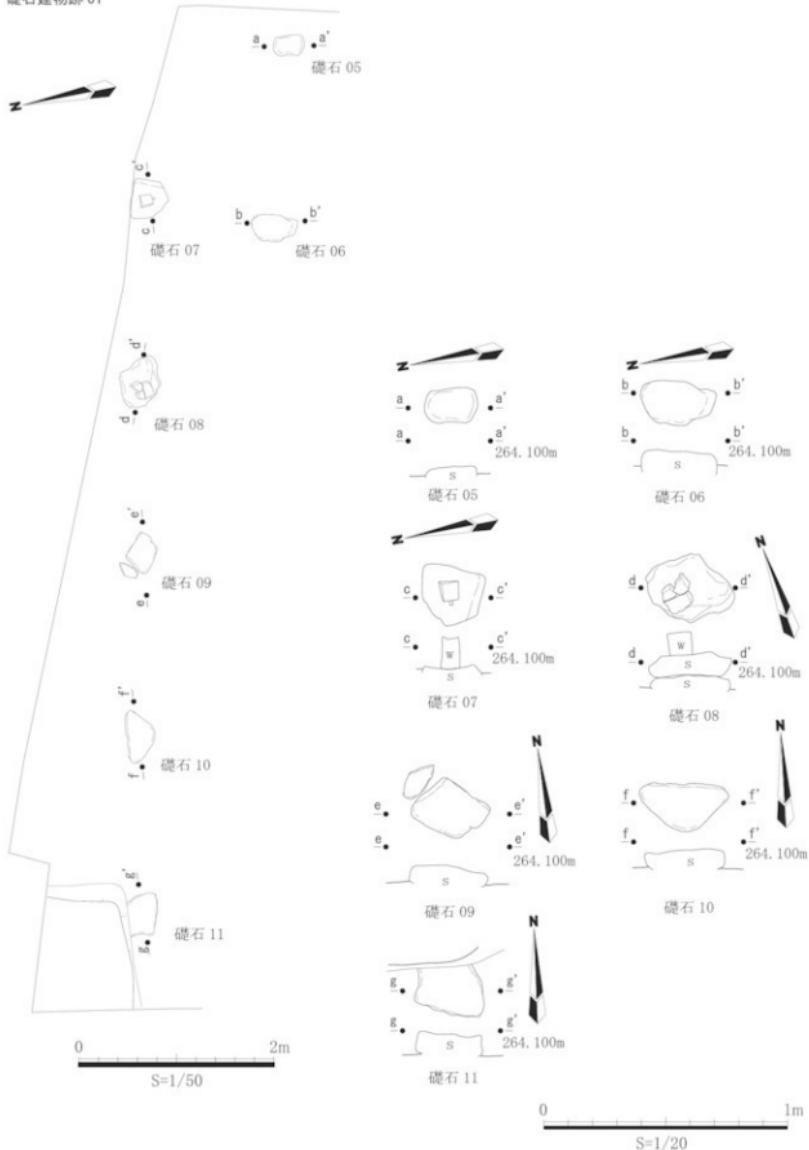
金属製品：237・238はキセル雁首。239はキセル吸い口。240は角釘。

註

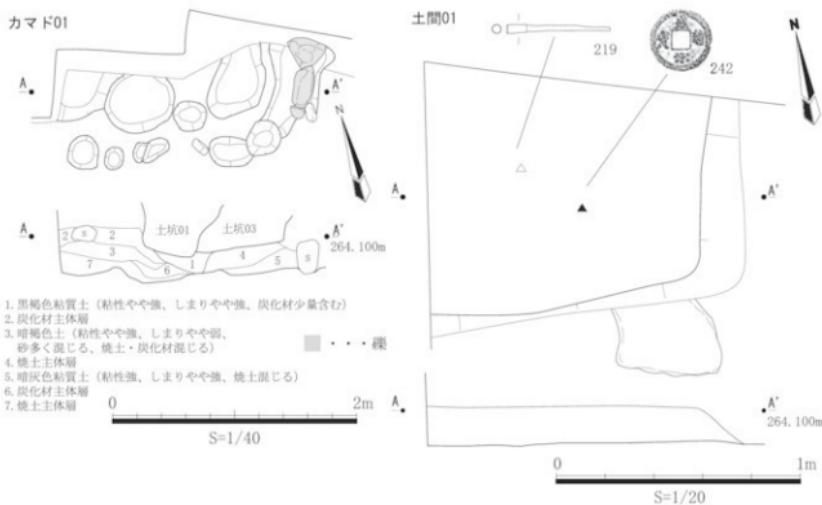
註1) 東京大学埋蔵文化財調査室堀内氏の教示による。

註2) 滋賀県文化財保護協会小林氏、辻川氏の教示による。

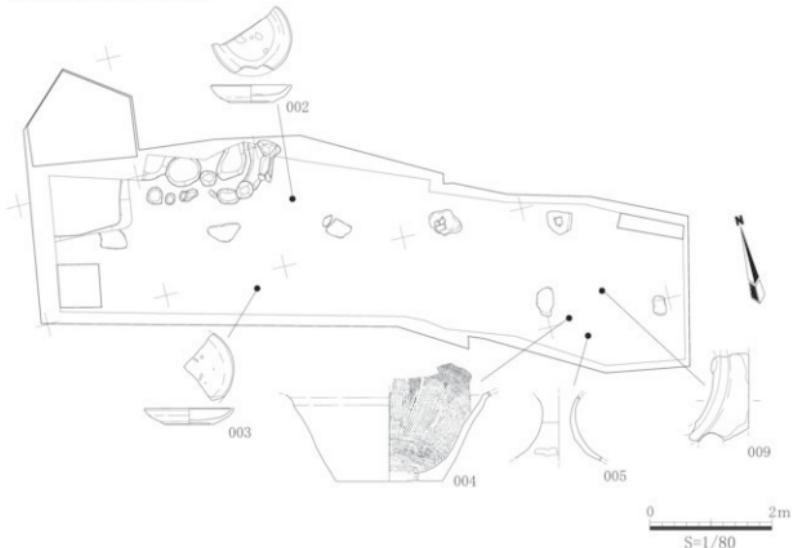
礎石建物跡 01



第8図 第1期遺構図（礎石建物跡01）



第1期遺構外出土遺物分布図



第9図 第1期遺構図 (カマド01、土間01、第1期遺構外出土遺物分布図)

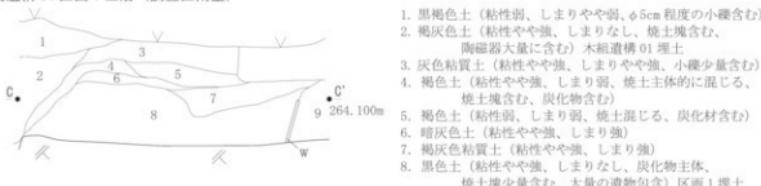
水場遺構 01



堆 01 見透し図（南から北）



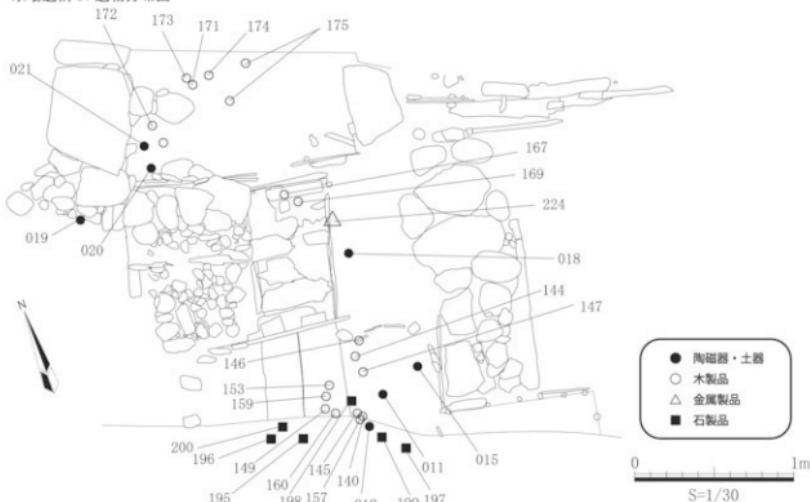
水場遺構 01 区画 1 土層（調査区南壁）



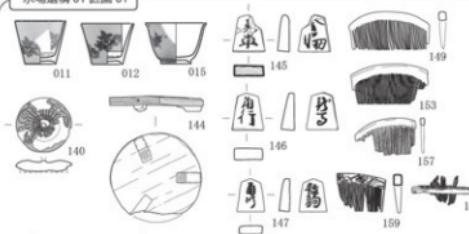
第10図 第2期遺構図（水場遺構01）

1. 黒褐色土（粘性弱、しまりやや弱、φ5cm程度の小礫含む）
2. 褐灰色土（粘性やや強、しまりなし、焼土塊含む、陶磁器大量に含む）木組遺構01 墓土
3. 灰色粘質土（粘性やや強、しまりやや強、小礫少量含む）
4. 褐色土（粘性やや強、しまり弱、焼土主体的に混じる、焼土塊含む、炭化物含む）
5. 褐色土（粘性弱、しまり弱、焼土混じる、炭化物含む）
6. 灰色土（粘性やや強、しまり強）
7. 褐灰色粘質土（粘性やや強、しまり強）
8. 黑色土（粘性やや強、しまりなし、炭化物主体、焼土塊少量含む、大量の遺物含む）区画1 墓土

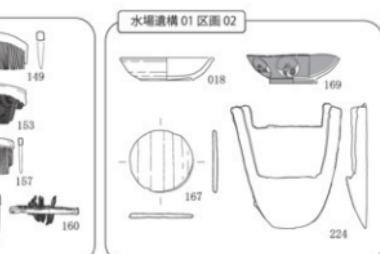
水場遺構01 遺物分布図



水場遺構01 区画01



水場遺構01 区画02

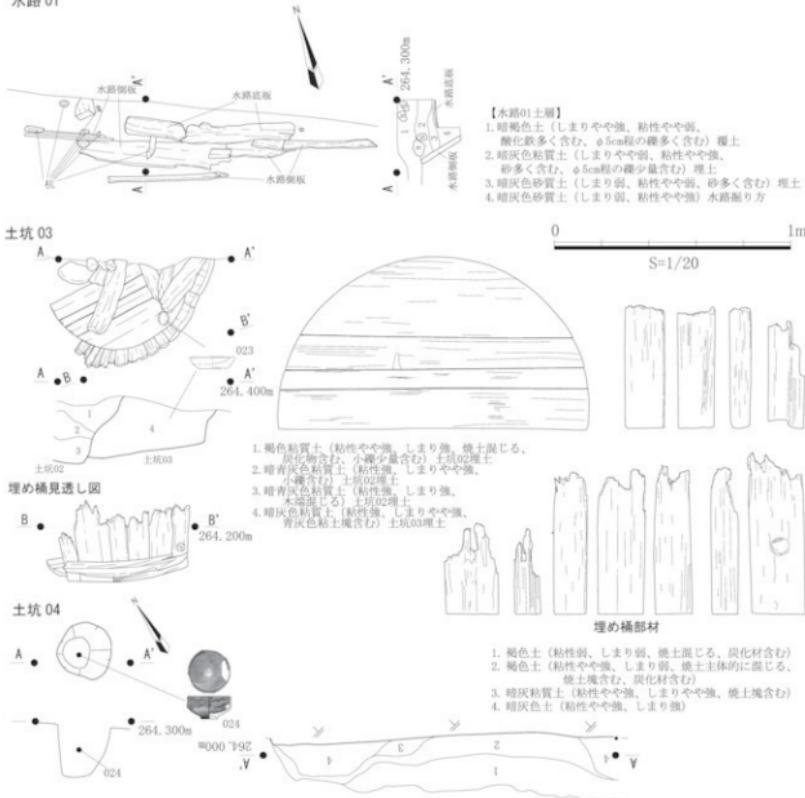


水場遺構01 区画03



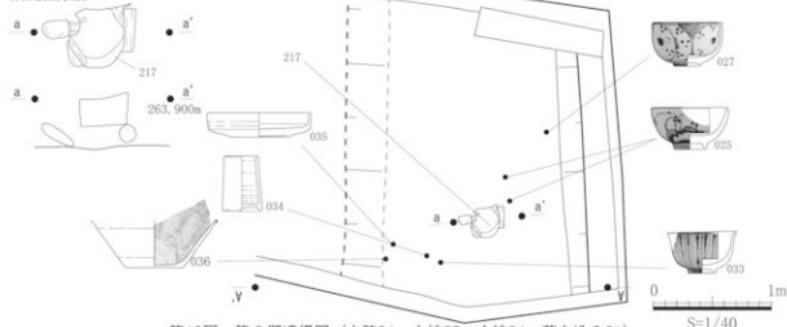
第11図 水場遺構01遺物分布図

水路 01



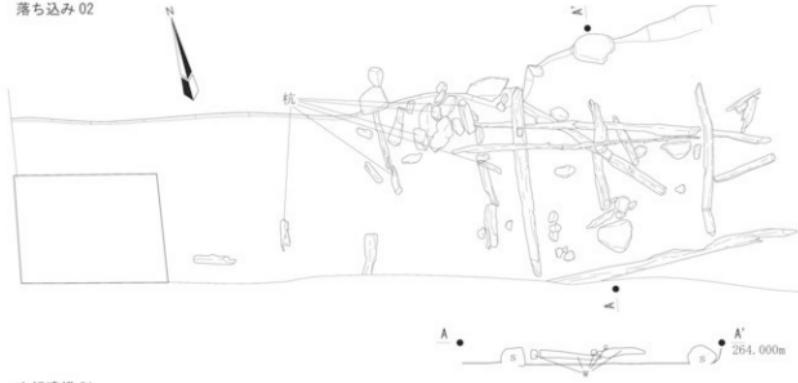
落ち込み 01

石田檢出狀況

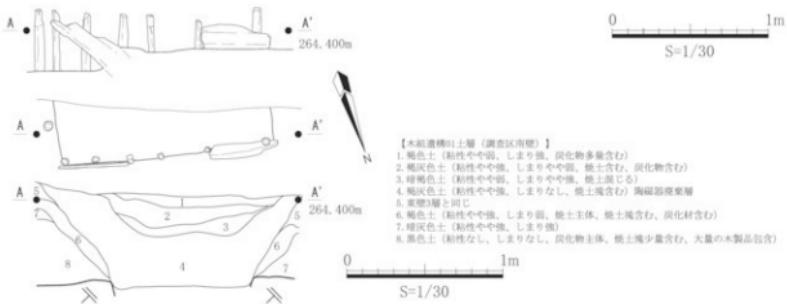


第12図 第2期遺構図（水路01・土坑03・土坑04・落ち込み01）

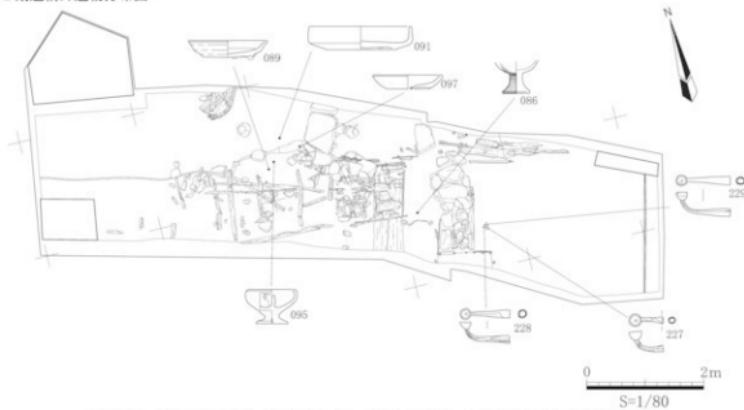
落ち込み 02



木組遺構 01

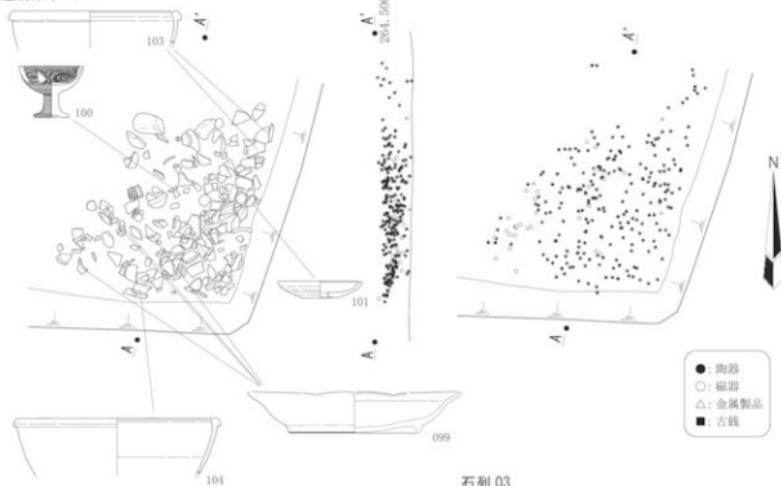


第2期遺構外遺物分布図

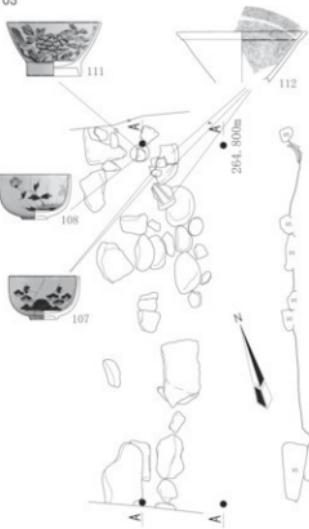


第13図 第2期遺構図（落ち込み02・木組遺構01・第2期遺構外遺物分布図）

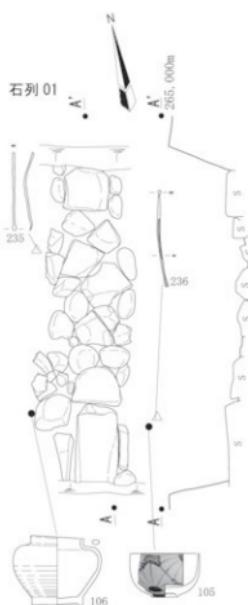
遺物集中 01



石列 03



石列 01



石列 02

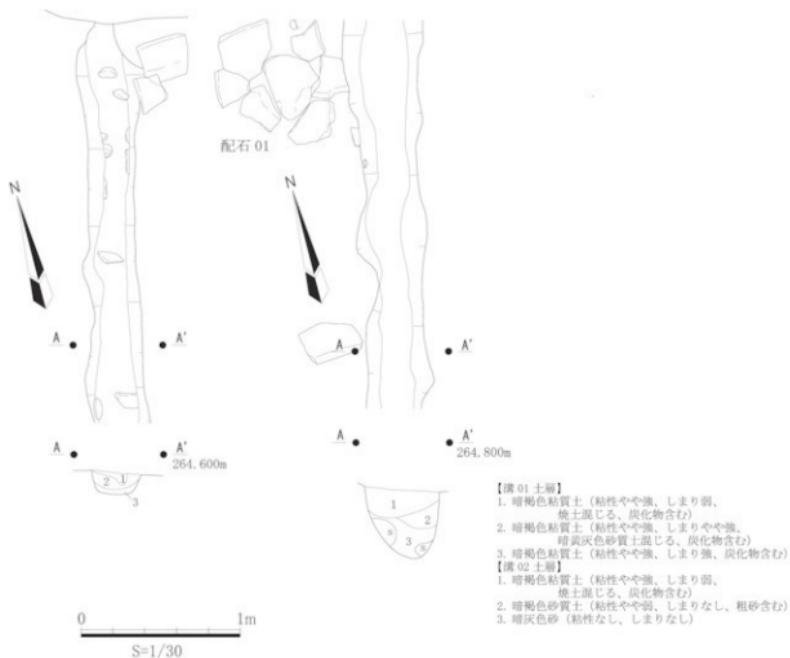


第14図 第3期遺構図（遺物集中01・石列01・石列02・石列03）

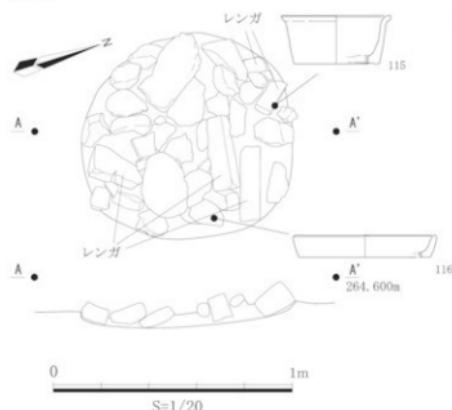
0 1m  
S=1/30

溝 01

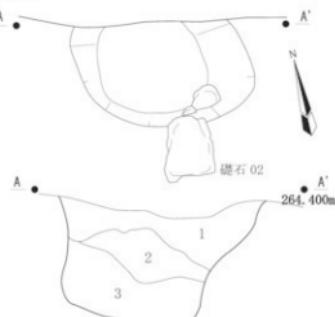
溝 02



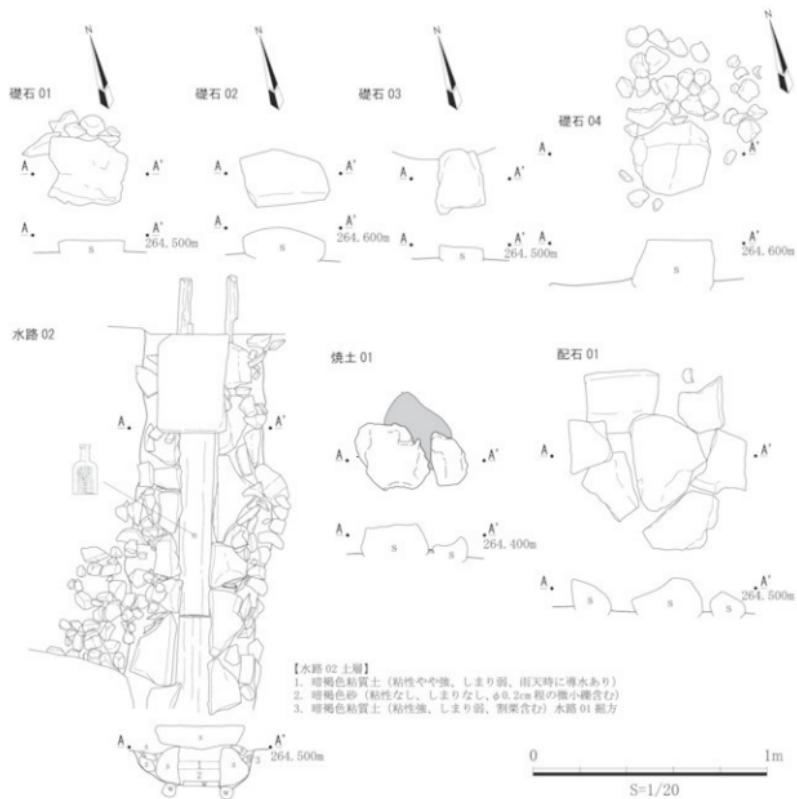
土坑 01



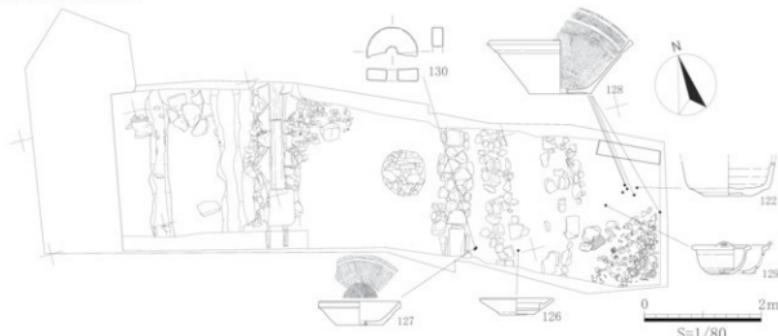
土坑 02



第15図 第3期遺構図(溝01・溝02・土坑01・土坑02)

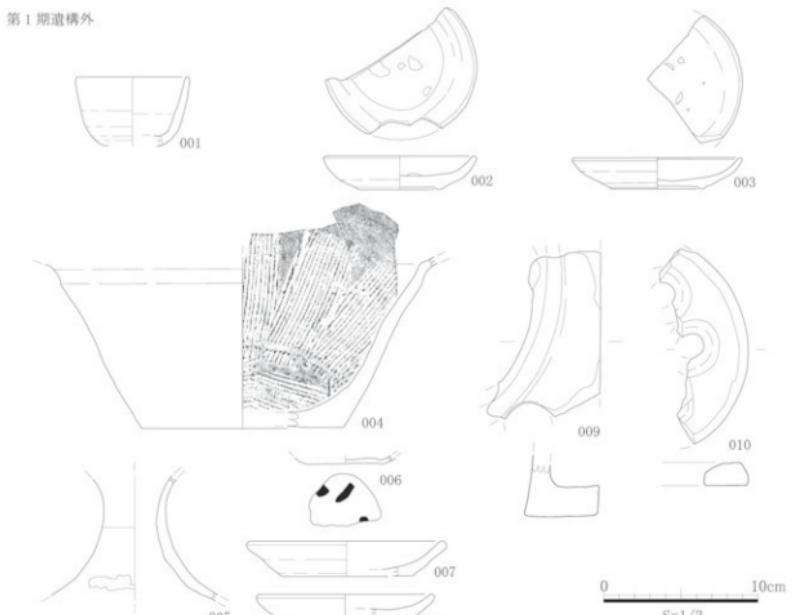


第3期遺構外遺物分布図



第16図 第3期遺構図(磚石01・磚石02・磚石03・磚石04・水路02・焼土01・配石01・第3期遺構外遺物分布図)

第1期遺構外



水場遺構 01 区画 01



区画 02



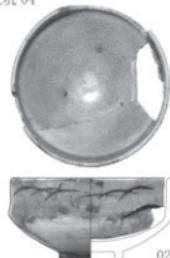
区画 03



土坑 03



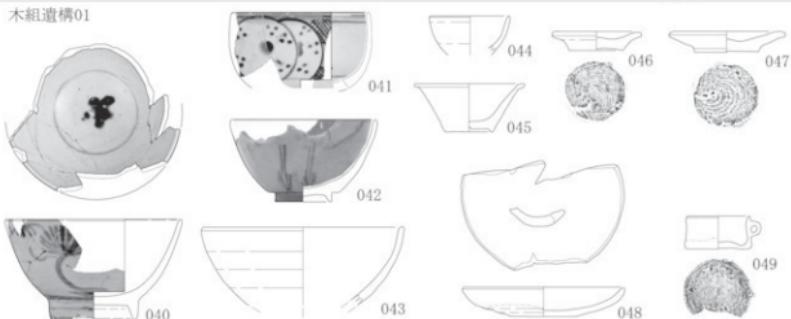
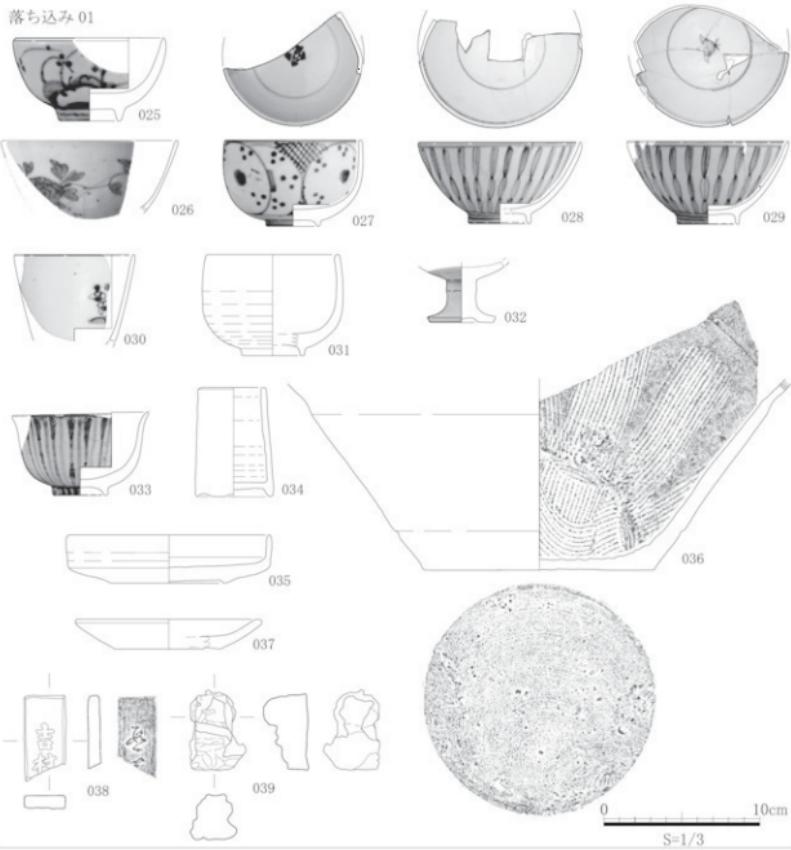
土坑 04



水場遺構 01 一括

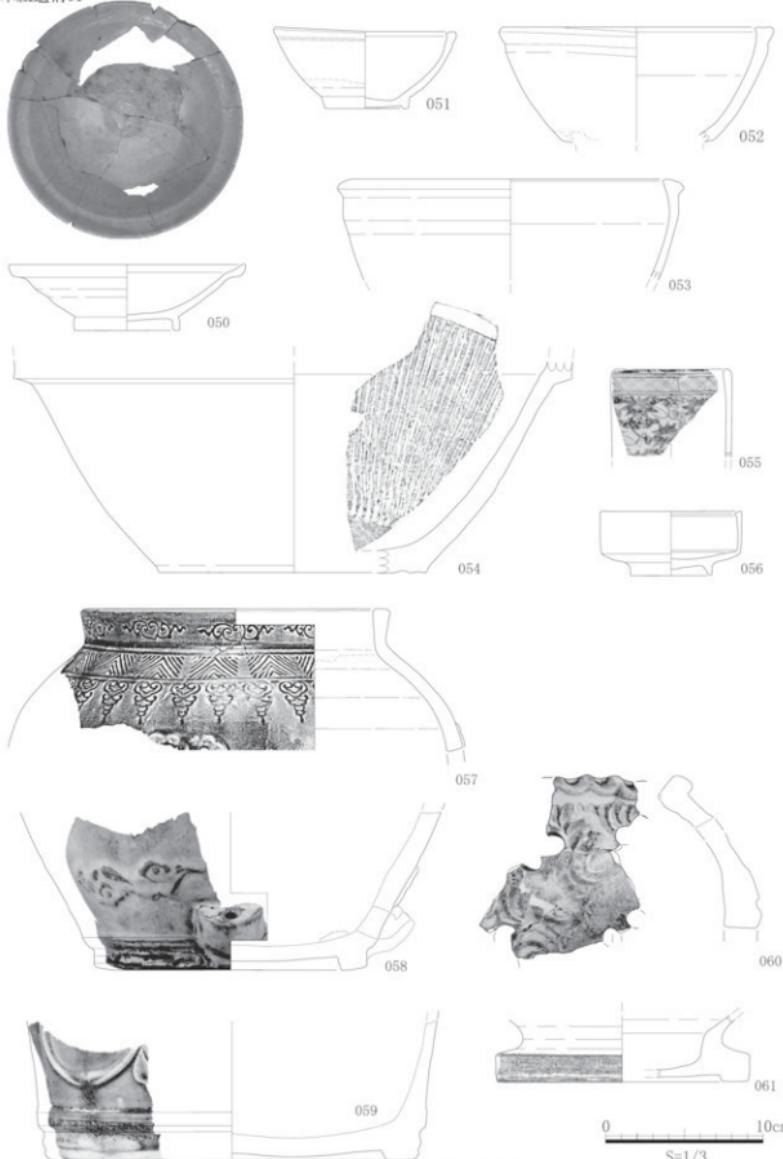


第17図 陶器・土器出土遺物 (1)



第18図 陶磁器・土器出土遺物（2）

木組遺構01



第19図 陶磁器・土器出土遺物（3）



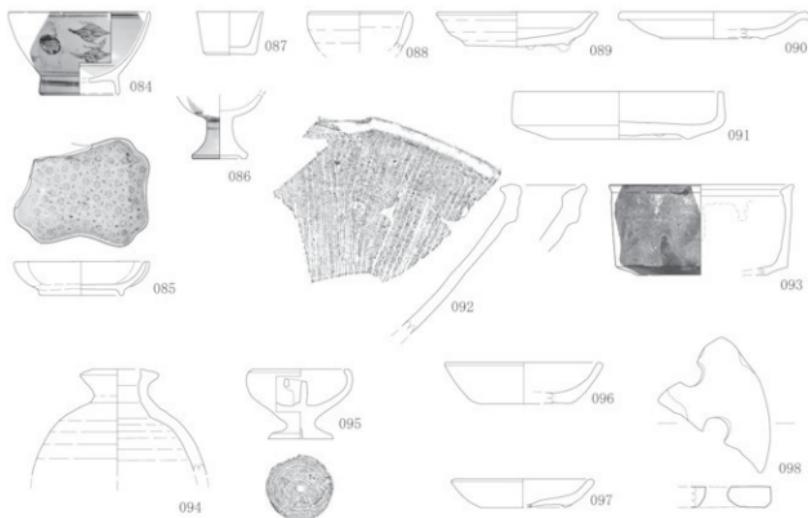
第20図 陶磁器・土器出土遺物 (4)

木組遺構01

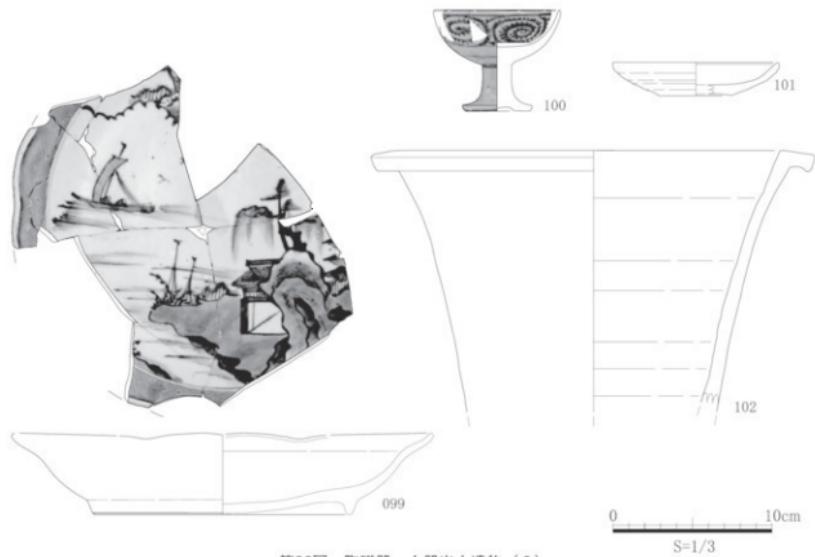


第21図 陶磁器・土器出土遺物（5）

第2期遺構外

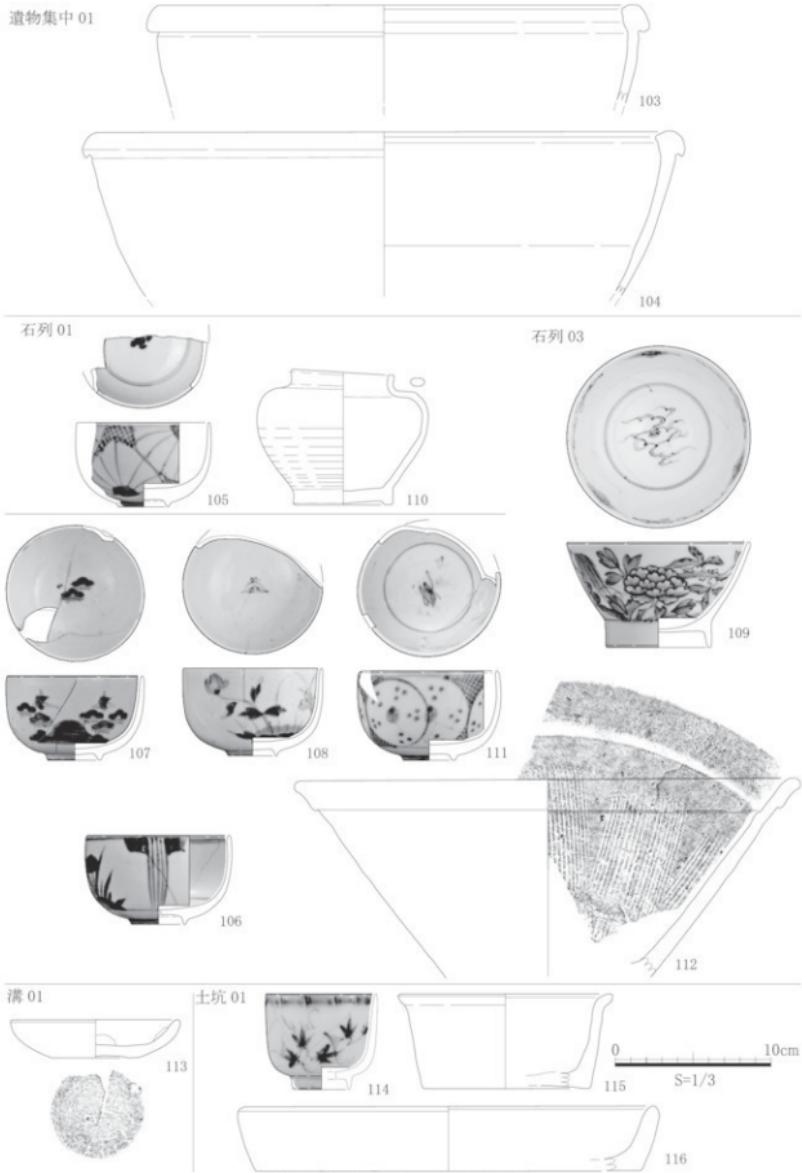


遺物集中 01



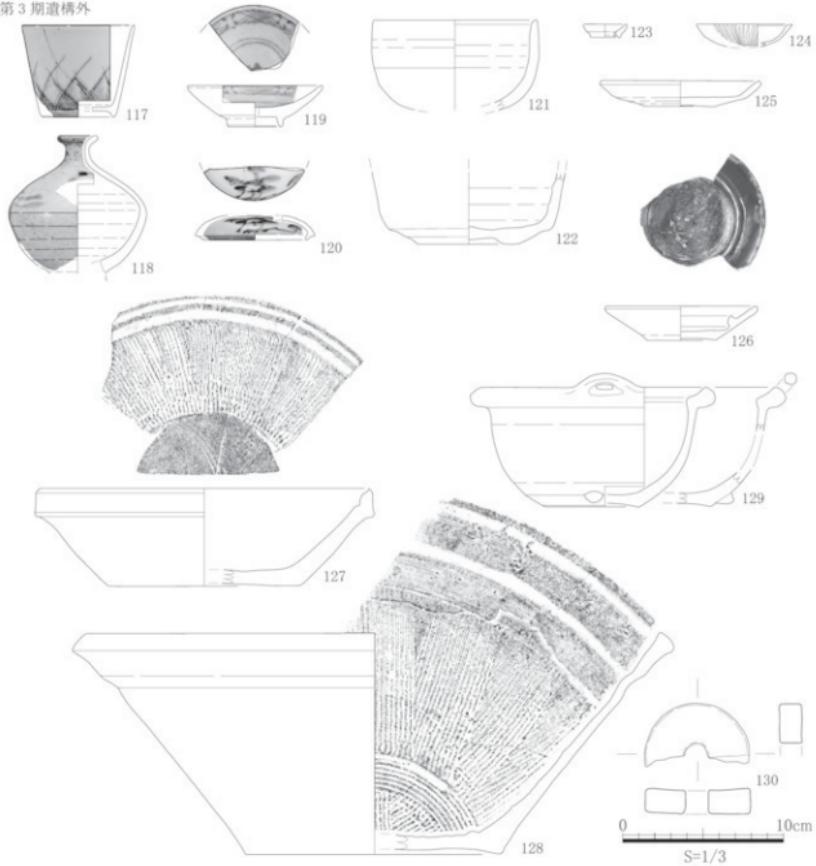
第22図 陶磁器・土器出土遺物（6）

0  
10cm  
S=1/3

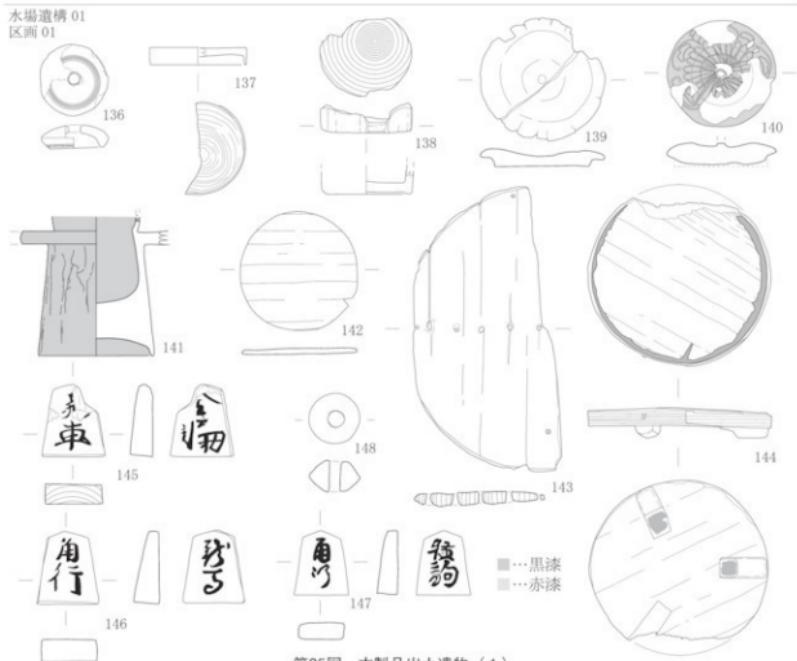
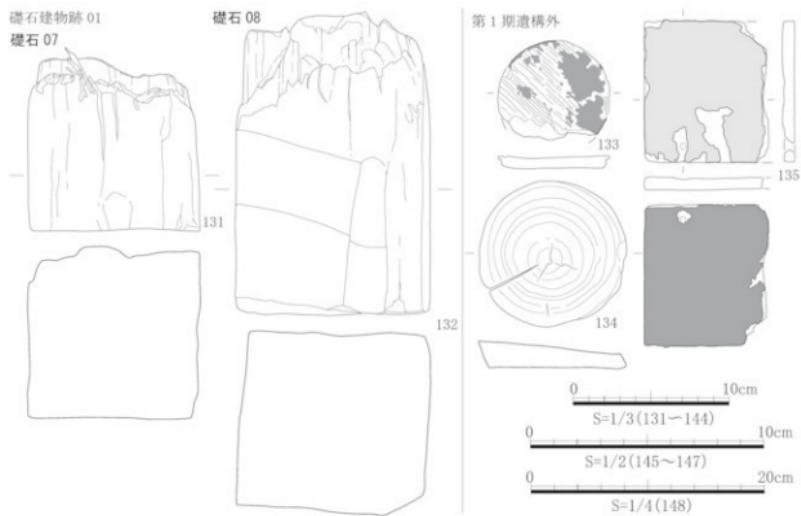


第23図 陶磁器・土器出土遺物（7）

第3期遺構外

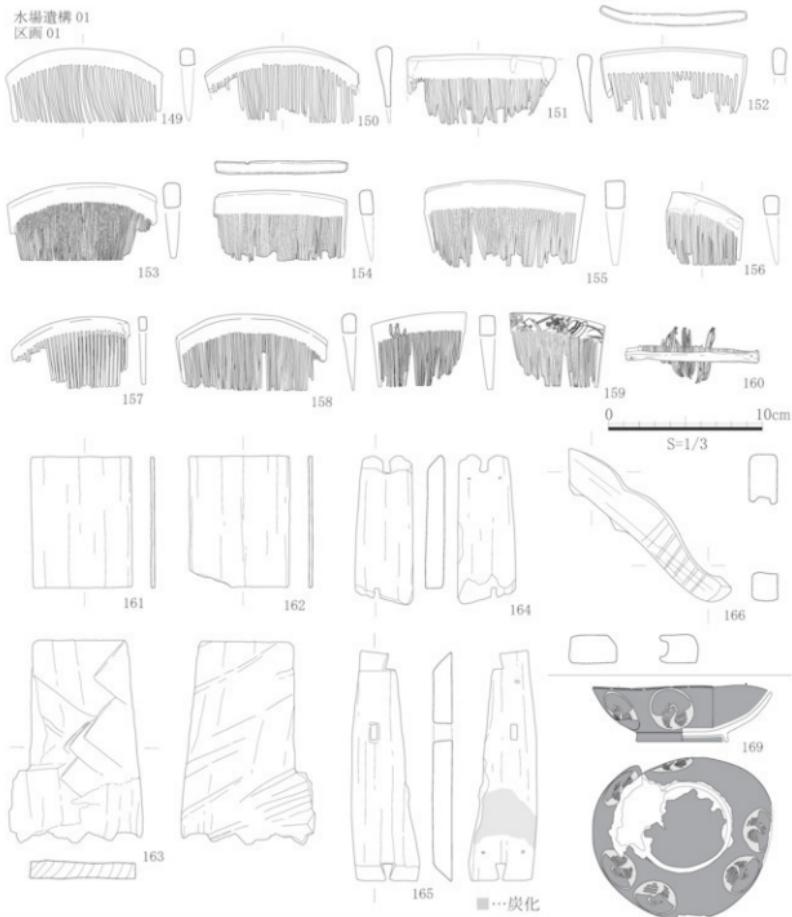


第24図 陶磁器・土器出土遺物（8）

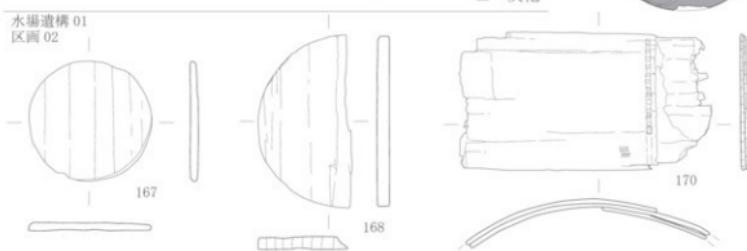


第25図 木製品出土遺物 (1)

水場遺構 01  
区画 01

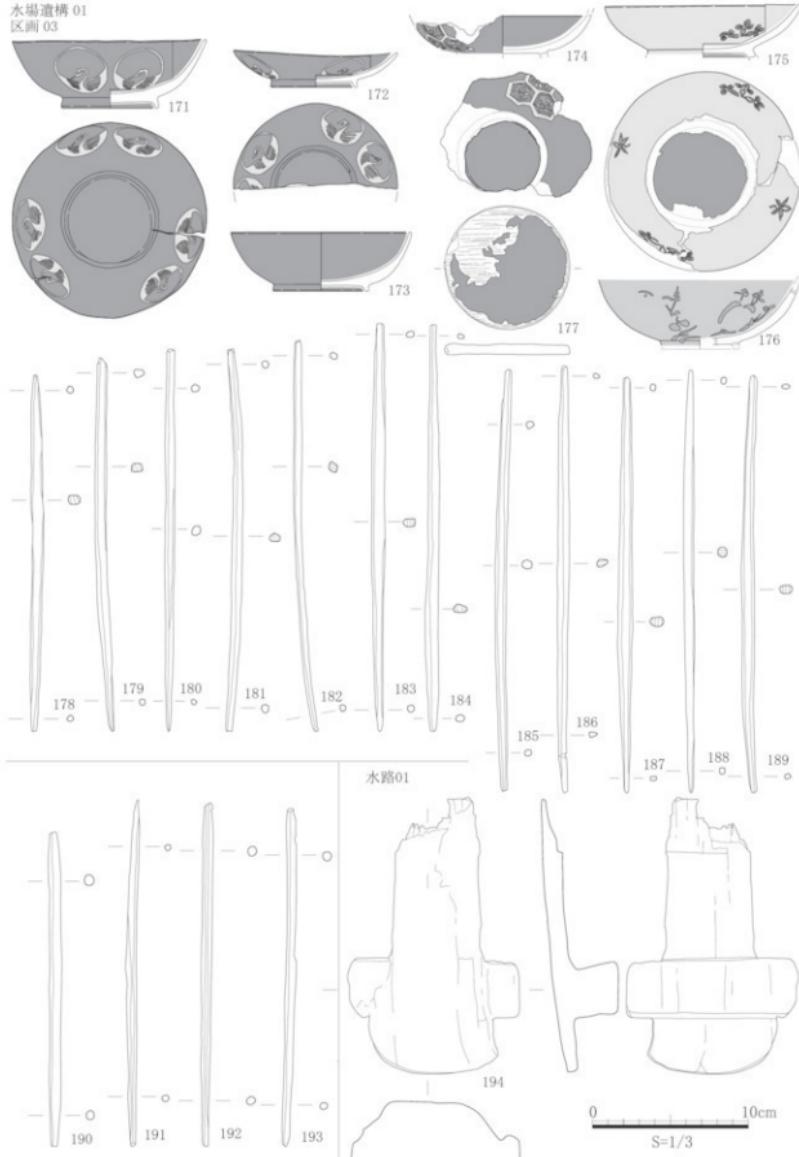


水場遺構 01  
区画 02



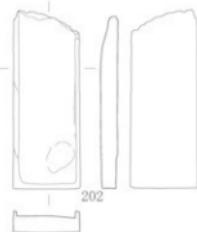
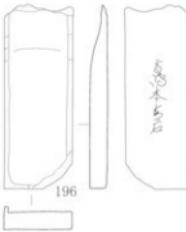
第26図 木製品出土遺物 (2)

水場遺構 01  
区画 03

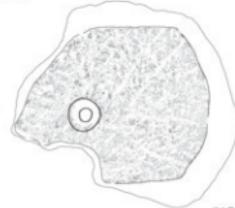


第27図 木製品出土遺物 (3)

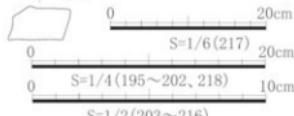
水場遺構 01  
区画 01



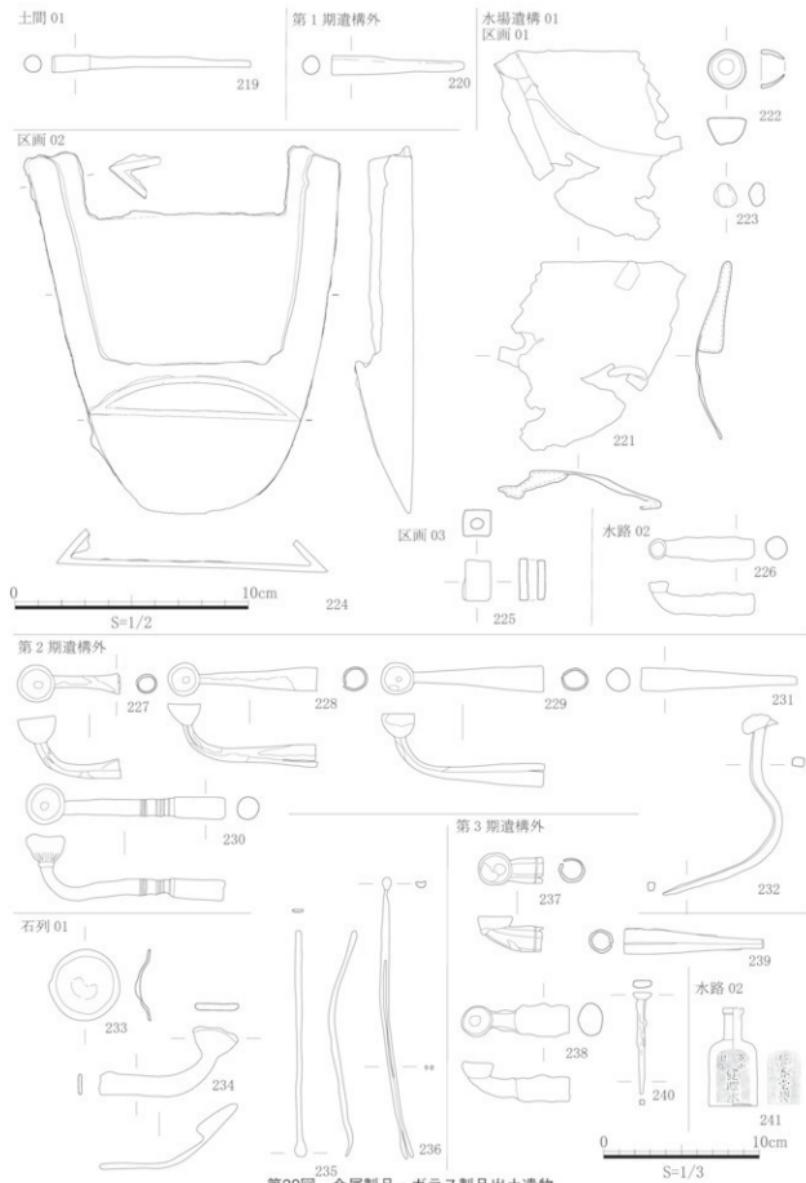
落ち込み 01



石列 03

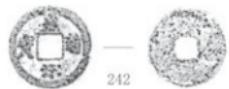


第28図 石製品出土遺物



第29図 金属製品・ガラス製品出土遺物

土間 01



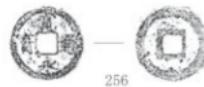
水場遺構 01区画01



落ち込み02



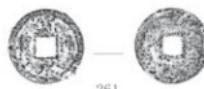
第2期遺構外



遺物集中01



石列01



第30図 錢貨出土遺物 (1)

石列01



262



溝02



263



第3期造構外



264



265



266



267



268



270



269



272



271



273



274



275



表採



276



277



278



279



第31図 銭貨出土遺物（2）

第3表 陶磁器・土器観察表

木製品御客表

器具番号	採取番号	分類	長さ	寸法(単位: cm)		本邦	備考
				幅	厚さ		
144	35254	PI_14 桶出湯器	高さ 底付物	1161.8	7651.8	桶口材	桶口材 桶身・不明
145	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	3.1	2.7	桶口材	桶口材 桶身・不明
146	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	3.1	2.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
147	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	2.7	1.1	桶口材	桶口材 桶身・不明
148	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	2.7	0.9	桶口材	桶口材 桶身・不明
149	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.8	10.2	桶口材	桶口材 桶身・不明
150	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	5.0	10.0	桶口材	桶口材 桶身・不明
151	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.7	9.7	桶口材	桶口材 桶身・不明
152	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.8	9.5	桶口材	桶口材 桶身・不明
153	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	5.0	9.8	桶口材	桶口材 桶身・不明
154	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.6	8.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
155	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	5.5	10.4	桶口材	桶口材 桶身・不明
156	35254	PI_14 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.7	10.0	桶口材	桶口材 桶身・不明
157	35254	PI_15 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.6	7.8	桶口材	桶口材 桶身・不明
158	35254	PI_15 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.9	9.8	桶口材	桶口材 桶身・不明
159	35254	PI_15 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	4.8	9.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
160	35254	PI_15 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	3.6	8.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
161	35254	PI_15 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	8.5	6.5	桶口材	桶口材 桶身・不明
162	35254	PI_15 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	8.5	6.5	桶口材	桶口材 桶身・不明
163	35254	PI_15 桶出湯器0146001	桶身11. 桶身の脚	13.2	8.7	桶口材	桶口材 桶身・不明
164	35254	PI_15 桶出湯器0146001	木端	3.8	9.7	1.2	小柄
165	35264	PI_15 桶出湯器0146001	用途不明	4.4	14.8	1.2	小柄
166	35264	PI_15 桶出湯器0146001	用材	(6.6)	(6.6)	1.2	小柄
167	35264	PI_15 桶出湯器0146002	用材	(6.7)	(7.8)	0.5	桶口材
168	35264	PI_15 桶出湯器0146002	用材	11.2	6.1	桶口材	桶口材
169	35264	PI_15 桶出湯器0146002	用材	11.6	3.3	桶口材	桶口材
170	35264	PI_15 桶出湯器0146002	用材	16.0	5.9	桶口材	桶口材
171	35274	PI_15 桶出湯器0146001	漆筒	12.5	4.4	6.2	不明
172	35274	PI_15 桶出湯器0146001	漆筒	10.5	2.4	5.6	不明
173	35274	PI_15 桶出湯器0146001	漆筒	11.6	3.8	6.1	不明
174	35274	PI_15 桶出湯器0146001	漆筒	12.6	3.4	(5.8)	不明
175	35274	PI_15 桶出湯器0146001	漆筒	118.0	35.0	4.31	漆筒(5.0)
176	35274	PI_15 桶出湯器0146001	漆筒	12.5	3.4	7.0	不明
177	35274	PI_15 桶出湯器0146001	漆筒	12.5	3.4	7.0	不明
178	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	8.0	0.7	桶口材	桶口材 桶身・不明
179	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	22.8	0.65	桶口材	桶口材 桶身・不明
180	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	22.9	0.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
181	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	24.5	0.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
182	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	25.0	0.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
183	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	26.0	0.8	桶口材	桶口材 桶身・不明
184	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	26.0	0.9	桶口材	桶口材 桶身・不明
185	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	27.0	0.7	桶口材	桶口材 桶身・不明
186	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	27.4	0.5	桶口材	桶口材 桶身・不明
187	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	26.65	0.6	桶口材	桶口材 桶身・不明
188	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	27.1	0.7	桶口材	桶口材 桶身・不明
189	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	26.8	1.1	桶口材	桶口材 桶身・不明
190	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	(26.1)	(0.9)	桶口材	桶口材 桶身・不明
191	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	22.2	0.8	桶口材	桶口材 桶身・不明
192	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	21.9	0.7	桶口材	桶口材 桶身・不明
193	35274	PI_16 桶出湯器0146002	食器11. 食器の脚	(21.6)	(0.7)	桶口材	桶口材 桶身・不明
194	35274	PI_16 桶出湯器0146001	漆筒	(17.6)	(11.1)	(4.2)	桶口材

第5表 石製品観察表

試作番号	材料番号	回数番号	検出造隙	種別	石材	長さ	幅さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
195	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	16.7	6.1	1.6	1.5
196	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	15.7	6.6	1.5	1.5
197	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	16.9	6.6	1.5	1.5
198	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	14.7	7.9	2.4	2.4
199	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	12.8	7.0	1.7	1.7
200	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	13.0	6.5	1.6	1.6
201	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	10.2	4.9	0.9	0.9
202	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	鏡	粘板岩	15.3	5.8	1.5	1.5
203	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.2	2.1	0.5	0.5	0.5
204	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.2	2.2	0.3	0.3	0.3
205	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	3.0	2.1	0.5	0.5	0.5
206	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	21.5	2.35	0.7	0.7	0.7
207	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.2	2.2	0.35	0.35	0.35
208	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.1	2.2	0.3	0.3	0.3
209	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	1.95	2.1	0.3	0.3	0.3
210	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.05	2.1	0.4	0.4	0.4
211	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	1.9	1.9	0.3	0.3	0.3
212	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.05	2.05	0.45	0.45	0.45
213	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.0	2.2	0.3	0.3	0.3
214	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.0	2.2	0.35	0.35	0.35
215	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.0	2.0	0.35	0.35	0.35
216	第284	P1_16	本山造隙01×4mm	磨石	2.0	2.0	0.35	0.35	0.35
217	第284	P1_16	落5.1×4mm	磨石	1.0	1.0	0.3	0.3	0.3
218	第284	P1_16	4×903	砥石	10.8	5.7	2.8	2.8	2.8

第6表 金属性製品観察表

試作番号	材料番号	回数番号	種別	材質	長さ	幅さ (mm)	厚さ (mm)	接合部	接合部
219	第294	P1_16	上端01	骨董鏡1	(8.5)	9.1	1.6	0.3	接合部
220	第294	P1_17	本山造隙01×4mm	骨董鏡1	(5.8)	9.1	0.4	接合部	接合部
221	第294	P1_17	本山造隙01×4mm	骨董鏡1	(8.1)	9.1	0.4	接合部	接合部
222	第294	P1_17	本山造隙01×4mm	骨董鏡1	1.1	9.1	0.6	接合部	接合部
223	第294	P1_17	本山造隙01×4mm	鏡先	23.5	20.3	3.2	接合部	接合部
224	第294	P1_17	本山造隙01×4mm	鏡先	1.7	1.1	1.1	接合部	接合部
225	第294	P1_17	本山造隙01×4mm	骨董鏡1	(4.5)	9.1	0.8	接合部	接合部
226	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	4.4	9.1	0.8	接合部	接合部
227	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	6.4	9.1	0.8	接合部	接合部
228	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	6.4	9.1	0.8	接合部	接合部
229	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	6.95	9.1	0.8	接合部	接合部
230	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	(8.3)	9.1	0.8	接合部	接合部
231	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	(6.7)	9.1	0.8	接合部	接合部
232	第294	P1_17	3.0mm造隙外	鏡	(7.7)	9.1	0.8	接合部	接合部
233	第294	P1_17	4.5mm外	骨董鏡1	(3.1)	9.1	0.8	接合部	接合部
234	第294	P1_17	4.5mm外	骨董鏡1	(5.9)	9.1	0.8	接合部	接合部
235	第294	P1_17	4.5mm外	骨董鏡1	9.7	0.5	0.3	接合部	接合部
236	第294	P1_17	4.5mm外	骨董鏡1	12.0	0.4	0.2	接合部	接合部
237	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	2.8	9.1	0.45	接合部	接合部
238	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	(4.6)	9.1	0.3	接合部	接合部
239	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	5.95	9.1	0.3	接合部	接合部
240	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	6.8	9.1	0.3	接合部	接合部
241	第294	P1_17	3.0mm造隙外	骨董鏡1	1.4	6.2	3.2	接合部	接合部

第7表 錄音觀察表

測定番号	機器番号	地上部位	通稱名	具種	A		B		C		D		E		質量 (g)	備考
					外殼長さ (mm)	外殼幅 (mm)	外殼厚さ (mm)	内殼長さ (mm)	内殼幅 (mm)	内殼厚さ (mm)	外殼長さ (mm)	外殼幅 (mm)	外殼厚さ (mm)	内殼長さ (mm)		
242	第301回	第1期	上部01	○宋通寶	24.0	19.0	8.0	7.0	7.0	1.0	3.2					
243	第301回	第2期	李出通寶01(西)1	寛永通寶	24.0	20.0	6.5	6.0	6.0	1.0	3.6					
244	第301回	第2期	洛5.5-5.02	○○○寶	22.0	18.0	7.5	6.0	6.0	1.0	3.1					
245	第301回	第2期	洛5.5-5.02	永樂通寶	23.0	18.0	8.0	7.0	7.0	1.0	2.0					
246	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	24.0	20.0	7.0	6.0	6.0	1.0	3.2					
247	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	19.0	7.0	6.0	6.0	1.0	2.6					
248	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	19.0	7.5	6.5	6.5	1.0	1.7					
249	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	28.0	21.0	8.0	6.5	6.5	1.0	4.3					
250	第301回	第2期	通額外-絵	永樂通寶	24.0	20.0	6.5	6.0	6.0	1.0	2.5					
251	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	24.0	20.0	7.0	6.0	6.0	1.0	3.7					
252	第301回	第2期	通額外-絵	天元通寶	23.0	19.0	7.5	6.5	6.5	0.5	1.9					
253	第301回	第2期	通額外-絵	○○九〇	23.0	19.0	8.5	7.0	7.0	0.5	2.6					
254	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	18.0	7.0	6.0	6.0	1.0	2.1					
255	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	19.0	7.0	6.0	6.0	0.5	2.4					
256	第301回	第2期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	18.0	7.0	6.0	6.0	0.5	2.7					
257	第301回	第3期	通額外-091	寛永通寶	24.0	20.0	7.0	6.0	6.0	1.0	3.1					
258	第301回	第3期	通額外-091	寛永通寶	24.0	20.0	7.0	6.0	6.0	1.0	3.6					
259	第301回	第3期	石901	寛永通寶	28.0	21.0	8.0	6.0	6.0	1.5	4.6					
260	第301回	第3期	47901	寛永通寶	23.0	20.0	7.0	6.5	6.5	1.0	2.3					
261	第311回	第3期	47901	寛永通寶	22.0	19.0	7.0	6.5	6.5	1.0	2.4					
262	第311回	第3期	47901	寛永通寶	24.0	20.0	7.5	6.5	6.5	1.5	2.8					
263	第311回	第3期	47901	寛永通寶	24.0	20.0	6.5	6.0	6.0	1.0	3.1					
264	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	23.0	19.0	7.0	6.5	6.5	0.5	2.3					
265	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	24.0	19.0	7.0	6.0	6.0	1.0	3.3					
266	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	23.0	20.0	7.5	7.0	7.0	0.5	2.4					
267	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	24.0	20.0	7.0	6.0	6.0	1.0	3.4					
268	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	18.0	8.5	7.5	7.5	0.5	1.7					
269	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	48.0 (横32.0)	46.0 (横28.0)	11.0	9.0	9.0	3.0	21.0					
270	第311回	第3期	通額外-絵	天元通寶	27.0	21.0	9.0	7.0	7.0	1.0	4.2					
271	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	27.0	21.0	8.0	7.0	7.0	1.0	3.9					
272	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	24.0	19.0	6.0	6.0	6.0	0.5	2.0					
273	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	19.0	7.5	6.5	6.5	1.0	3.4					
274	第311回	第3期	通額外-絵	○○○寶	24.0	19.0	8.0	7.0	7.0	1.0	3.4					
275	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	19.0	8.0	7.0	7.0	0.5	2.6					
276	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	22.0	18.0	7.0	6.5	6.5	0.5	2.2					
277	第311回	第3期	通額外-絵	天元○寶	24.0	21.0	8.0	7.5	7.5	0.5	2.8					
278	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶	24.0	21.0	7.0	6.0	6.0	1.0	3.3					
279	第311回	第3期	通額外-絵	寛永通寶												

## 第4章 旧柳町一丁目地点より出土した動物遺存体

はじめに

甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）では骨製かんざしやアワビ類、シジミ属などが第1期～第3期の遺物包含層より確認された。それらは石列覆土や土坑から出土したものもあるが、多くは包含層から出土した。年代的には表土剥ぎ中に出土したものを除き、第1期遺構面は中世～江戸時代初期、第2期は江戸時代中期、第3期遺構面は江戸時代後期～幕末頃の包含層に帰属するものとされる。

### 1. 資料について

本遺跡の資料は、排土および第1期遺構面は遺構外一括、第2期遺構面は水場遺構01区画1、区画3・水路01・遺構外一括、第3期遺構面は遺物集中01・石列01・土坑01・溝02・遺構外一括の約11箇所から出土している。

動物遺存体の採取方法には、現場採取資料と水洗篩別資料の2種類がある。現場採取資料は、発掘時に土器や石器などの人工遺物と同様に採取された資料である。水洗篩別資料は、貝や骨が集中して確認される範囲を土ごと土養袋などに採取して、現場内または後日、籠を用いて貝や骨などの内容物と土を水洗選別した資料である。水洗篩別の目的として、現場で目視採取できないような微細な資料を採取することがあげられる。本遺跡の資料117点は、現場採取資料として全量採取している。

### 2. 分析結果

#### (1) 貝類

貝類は合計49点、6種類が出土している。個体数の計上方法として二枚貝では、ほぼ完形な殻頂部を1点としておこない、それ以外のものは破片資料とした。二枚貝は左殻と右殻を分類しており、左殻・右殻のうち多い数値を最小個体数として貝種組成を計算した（第9表）。巻貝の計上方法は、本来ならば軸が半分以上残っているものを1点とするが、本遺跡の資料で巻貝はアワビ類しか出土していない、またアワビ類は巻貝の中でも殻が椀状に変化したもので軸がないため、ほぼ完形のものを1点と計上し、それ以外のものは破片資料とした。

最小個体数による比較を第9表に示した。その結果、本遺跡で出土している主な貝種はシジミ属であった。シジミ属は特に3種が知られており、淡水と海水が混ざる汽水域で採れるヤマトシジミ、淡水域で採れるマシジミ、琵琶湖の固有種のセタシジミがある。山梨県でも海産貝類が出土することからヤマトシジミが搬入された可能性もあるため、今回はシジミ属に留めることとした。アワビ類はミミガイ科ミミガイ属でクロアワビ、メガイアワビ、マダガカアワビ、トコブシの4種が知られる。トコブシは成長しても7cm程度なので本資料から除外できるが、他の種においては筆者の手元に標本がないため、アワビ類とした。

サルボウガイやアカガイと思われる資料は完形資料ではないため、貝の肋の数が計上できないのでフネガイ科に留めることとした。

アワビ類のように頑丈で真珠光沢のある貝類の加工品で碁石2点（試料No.28、29）が検出されているが、碁石に加工されているため同定できない。

#### (2) 魚類

魚類は合計4点出土している。背鰭の棘が1点出土しているが、種同定はできない部位である。2点は擬鎖骨かと思われるが種の同定には至らなかった。残り1点はマグロ属の尾椎であるが大型のものではない。マグロ属は甲府城下町遺跡内だと甲府城下町遺跡XVIでも検出されている。

#### (3) 鳥類・哺乳類

鳥類は2点出土しているおり、上腕骨と右の尺骨かと思われる。欠損しているので計測数値はおよそである。

哺乳類はウシやウマなどの大型哺乳類の骨を簪（かんざし）に加工していると思われる。簪の表裏面が緻密質な

ことと、2cm幅の直線的な素材を利用できる骨の大きさから推察される。

#### (4) その他

第2期遺構外一括からフジツボ類が1点出土しているが、これは当時の人々が利用した可能性もあるが、他の貝類に付着していたものが混入した可能性もある。

### 3.まとめ

本遺跡の動物遺存体の出土傾向をまとめる。貝類は破片資料を含めた第8表を見ると多く感じるが、個体数として計上できるものは少ない。破片資料も含めて概観すると、アワビ類が第1～3期にかけて出土し、特に第1期ではフネガイ科1点を除けばすべてアワビであり、シジミ属は本遺跡の第1期からは出土していない。これは種別による貝の強度の違いが残存率に影響するためであり、単純に人々の嗜好性の変化があったとは言えない。第1期のアワビ類では約12cm大が3点と約19cm大が1点（試料No.1）出ており、想像力を逞しくすれば、宴席で主賓に特に大きなアワビが振る舞われたのだろうか。

魚類4点と鳥類2点の資料からは調理の際に生ずる切断痕などは確認されなかった。

哺乳類のウシ・ウマなどの大型哺乳類を材料としたと思われる骨製かんざし（試料No.25）は、整形の際に削った後に細かな調整のため研がれ、研ぎの擦痕を消すかのように全体的によく磨かれている。簪には耳搔きが欠損した痕跡が見られないことから、元来付属していないか、または欠損後に削り磨くなどした可能性がある。耳搔きは無いが形状から分類すると笄（こうがい）ではなく簪と思われる。そして断面形状から見る限り、髪を巻き付ける笄としては薄いため強度が弱そうな点から、整髪後に髪を飾りつけた装飾品の簪であろう。

本遺跡の資料は海浜部に接しない甲斐国において、アワビ類、フネガイ科、アカガイ、ハイガイ、ハマグリ、マグロ属の尾椎など海産食物の当時の多様性を知る貴重な資料となる。

#### 参考文献・引用文献

奥谷喬司 2000 「日本近海産貝類図鑑」

江戸遺跡研究会 2001 「図説 江戸考古学研究事典」

山梨県立博物館 2008 「甲州食べもの紀行－山国のか豊かな食文化－」

植月学 2015 「甲府城下町遺跡出土の動物遺体」『甲府城下町遺跡X VI』 245～251頁

第8表 甲府城下町遺跡(旧柳町一丁目地点)出土貝・骨同定一覧

試料No.	出土層位	出土遺構	種別	部位	左右	備考
1	第1期	遺構外一括	アワビ類	-	-	1個体 蝦幅19.0cm
2	第1期	遺構外一括	アワビ類	-	-	1個体 蝶幅(12.1cm)
3	第1期	遺構外一括	アワビ類	-	-	1個体 蝶幅(12.8cm)
4	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
5	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
6	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
7	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
8	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
9	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
10	第1期	遺構外一括	アワビ類	-	-	1個体 蝶幅(12.8cm)
11	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
12	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
13	第1期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
14	第1期	遺構外一括	フネガイ科	破片	-	
15	第2期	水場遺構01区両3	鳥骨	上胸骨?	-	
16	第2期	水場遺構01区両3	魚骨	椎節骨?	-	
17	第2期	木組遺構01	ハマグリ	-	左	
18	第2期	木組遺構01	シジミ類	-	右	蝶長1.9cm、蝶高(1.6cm)
19	第2期	木組遺構01	シジミ類	-	左	蝶長2.4cm、蝶高(1.9cm)
20	第2期	木組遺構01	ハマグリ	-	左	蝶高4.0cm
21	第2期	木組遺構01	アワビ類	破片	-	
22	第2期	木組遺構01	マコロ属	尾椎	-	
23	第2期	木組遺構01	魚骨	椎節骨?	-	
24	第2期	土坑02	ハマグリ?	破片	-	
25	第2期	遺構外一括	ウシ・ウマ?	骨製品	-	骨製かんざし 長12.3cm、幅1.9cm
26	第2期	遺構外一括	貝殻	破片	-	
27	第2期	遺構外一括	シジミ類?	破片	-	
28	第2期	遺構外一括	アワビ類?	破片	-	碁石 長(2.0cm)、厚(0.3cm)
29	第2期	遺構外一括	アワビ類?	破片	-	碁石 長(1.8cm)、厚(0.5cm)
30	第2期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
31	第2期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
32	第2期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
33	第2期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
34	第2期	遺構外一括	アワビ類	-	-	1個体 蝶幅(11.3cm)
35	第2期	遺構外一括	アワビ類	-	-	1個体 蝶幅(14.4cm)
36	第2期	遺構外一括	ハマグリ?	破片	-	
37	第2期	遺構外一括	ハマグリ	-	右	
38	第2期	遺構外一括	ハマグリ	-	左	蝶高5.3cm
39	第2期	遺構外一括	ハマグリ	-	左	蝶長6.5cm、蝶高5.4cm
40	第2期	遺構外一括	ハマグリ	破片	-	
41	第2期	遺構外一括	シジミ類	破片	-	
42	第2期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
43	第2期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	
44	第2期	遺構外一括	ツツボ類	破片	-	
45	第2期	遺構外一括	アワビ類	-	-	1個体 蝶幅14.3cm
46	第2期	遺構外一括	シジミ類	-	右	
47	第2期	遺構外一括	貝殻	破片	-	
48	第2期	遺構外一括	アワビ類	破片	-	破片数5
49	第3期	遺物集め01	シジミ類	破片	-	
50	第3期	石列01	シジミ類	-	右	蝶長1.8cm、蝶高1.5cm
51	第3期	石列01	シジミ類	-	右	蝶高(1.6cm)
52	第3期	石列01	ハマグリ	-	左	蝶長(2.9cm)、蝶高(2.6cm)
53	第3期	石列01	ハマグリ	-	右	
54	第3期	石列01	ハマグリ	-	左	
55	第3期	石列01	ハマグリ	破片	-	
56	第3期	石列01	フネガイ科	破片	-	
57	第3期	石列01	鳥類	尺骨?	右?	GL計測不可、Bp(1.79)
58	第3期	石列01	アワビ類	-	-	
59	第3期	石列01	ハマグリ	-	右	蝶長2.9cm、蝶高2.6cm
60	第3期	石列01	ハイガイ	-	左	蝶長4.2cm、蝶高3.5cm
61	第3期	石列01	ハマグリ	-	左	蝶長(4.5cm)、蝶高4.2cm
62	第3期	石列01	シジミ類	破片	破片数2	
63	第3期	石列01	アワビ類	破片	破片数1	

試料No.	出土層位	出土遺構	種別	部位	左右	備考
64	第3期	土坑01 溝02	フネガイ科 ハマグリ?	- 破片	左 -	殻長(8.1cm)、殻高(6.4cm)
65	第3期	道溝外一括	アワビ類	破片数4	-	
66	第3期	道溝外一括	アワビ類	破片数10	-	
67	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	
68	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左右	1個体のまま癒着 殻長3.5cm、殻高3.1cm
69	第3期	道溝外一括	魚類	骨ビレの輪	-	
70	第3期	道溝外一括	アカガイ	-	右	肋数42 殻長10.5cm、殻高8.4cm
71	第3期	道溝外一括	ハマグリ	-	左	若体 殻長(2.3cm)、殻高2.2cm
72	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻長(2.8cm)、殻高2.7cm
73	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	
74	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	
75	第3期	道溝外一括	アワビ類	破片	-	
76	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	
77	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左右	1個体のまま癒着 殻長2.4cm、殻高2.2cm
78	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左右	1個体のまま癒着 殻長2.6cm、殻高2.2cm
79	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	殻高1.9cm
80	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	殻長2.0cm、殻高1.7cm
81	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻長(1.9cm)、殻高1.6cm
82	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	殻長2.0cm、殻高(1.6cm)
83	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	
84	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	殻長(2.0cm)、殻高1.7cm
85	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	殻長2.2cm、殻高(1.9cm)
86	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻高(2.1cm)
87	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻高(2.1cm)
88	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻長2.3cm、殻高2.1cm
89	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	
90	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	
91	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	殻高(2.3cm)
92	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	右	
93	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻高(2.2cm)
94	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻長(2.4cm)、殻高(2.1cm)
95	第3期	道溝外一括	シジミ類	破片	-	
96	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻長2.9cm、殻高2.7cm
97	第3期	道溝外一括	ハマグリ	-	右	
98	第3期	道溝外一括	貝類	破片	-	
99	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	
100	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	
101	第3期	道溝外一括	シジミ類	-	左	殻長2.6cm、殻高2.3cm
102	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	
103	第3期	道溝外一括	アワビ類	破片数5	-	
104	第3期	道溝外一括	アワビ類	破片	-	破片数3
105	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	破片数4
106	第3期	道溝外一括	アワビ類	破片	-	破片数5
107	第3期	道溝外一括	フネガイ科	破片	-	破片数1
108	耕土		シジミ類	破片	-	
109	耕土		シジミ類	破片	-	破片数1
110	耕土		アワビ類	破片	-	破片数4
111	耕土		アワビ類	破片	-	破片数4

第9表 貝種別最小個体数一覧

	シジミ属			ハマグリ			アカガイ			フネガイ科			ハイガイ			アワビ類		
	左右	左	右	個体数	左	右	個体数	左	右	個体数	左	右	個体数	左	右	個体数	左	右
第1期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
第2期	0	2	2	3	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
第3期	16	14	16	2	2	2	0	1	1	1	0	1	1	0	1	0	0	

※二枚貝は左殻・右殻の殻頂部の出土点数の多い方を採用した。

## 第5章 総括

### 第1節 調査地点における土地造成の変遷

調査地点では、礎石建物跡、カマド、土間といった建物を成す遺構や、水場遺構のような水利関連遺構があり、その他土坑、溝などの遺構が検出している。今回の調査では、遺構の切り合い関係や構築された生活面により大きく3期に区分して遺構を検出した。最も古い時期の遺構は、地山上に形成された礎石建物跡とそれに付帯するカマド・土間である。各遺構から遺物の出土が見られなかったが、遺構外より出土した陶磁器の年代から、中世～江戸時代初期頃に比定した。甲府城下町が甲府城築城に合わせて整備される時に当たり、甲府城下町初期の柳町の様相である。検出した礎石の配列は1列で、建物の長軸方向は直接的に確認しなかった。ただし、検出したカマドの配置をかんがみると、現在の甲州街道から約4mの地点にある。近世の民家建築を概観すると、カマドは建物の入り口からみて奥方に構築される傾向にある。この傾向に拠れば、門口が柳町通りに面する町屋であることが示唆される。

第1期廃絶後に造成が行われ、層厚約20cmの造成土（東6層、南13・17層、北18層）が堆積している。ここでは「第1期造成」とした。水場遺構01はこの造成土を掘り込んで構築される。石組みの間に出土した陶磁器（019）の年代より江戸時代初期頃に構築されたものと思われ、区画03出土陶磁器の年代から短期間に廃絶したものと思われる。また、区画1に投棄された陶磁器は17世紀後葉～末頃に限定される一括資料であり、この後に水場遺構01が完全に埋没する。区画1出土陶磁器はすべて激しく被熱しており、火災による被害を受けている状況が見て取れるが、文献史料における大火の記録はない。

水場遺構01廃絶後に造成が行われており、層厚約5cmの造成土（東5層、南13・14・16層、北12層）が堆積している。当地点における「第2期造成」とした。この面を掘り込んで構築された遺構は、今回の調査で確認することができなかった。その後、東3・4層、南9～11層、北9～11層の堆積が見られ、これらの層上に落ち込み01、木組遺構01、石列01～03が構築されている。これらの遺構より出土した遺物はいずれも18世紀後葉を上限とする。出土陶磁器はすべて被熱していることから、火災による罹災が想定される。文献史料では、明和七（1770）年に甲府大火が起きた記録がある。落ち込み01は当大火に伴い構築された焼土整理坑であると想定した。また、木組遺構01は構成する杭の端部が炭化していることから、当該期以前に構築・機能していた構造物で、大火に伴い廃絶・焼失物の廃棄土坑として転用されて埋没したものと考えられる。なお、焼土整理坑は、江戸跡において町屋の裏手に構築されることが多い。第1期遺構面で検出した建物跡より想定した区割りをかんがみると、焼土整理坑の位置は八日町通りに近接しすぎており、当該期においても柳町に門口を持つ東西方向の区割りが想定できる。

18世紀後葉頃の遺構面の後、調査区東側では南2～4層、北7・8層の堆積が見られ、東側の区画に盛土を行っている。この盛土上に遺物集中01が構築される。遺物集中01は19世紀中葉～暮末の遺物が主体であり、近代の遺物

地番	17世紀			18世紀			19世紀			
	西半	中央	東半	西半	中央	東半	西半	中央	東半	
第一期 造成層	第1段4万 第2段4万 第3段4万	第2段4万 第3段4万 第4段4万	第3段4万 第4段4万 第5段4万	第1段2万 第2段2万 第3段2万	第2段2万 第3段2万 第4段2万	第3段2万 第4段2万 第5段2万	第1段1万 第2段1万 第3段1万	第2段1万 第3段1万 第4段1万	第3段1万 第4段1万 第5段1万	
第二期 造成層	木組遺構01 石列01～03 落ち込み01 木組遺構01 石列01～03 落ち込み01 木組遺構01									
第三期 造成層										

E: 池田道標  
S: 黒森井戸  
N: 開拓アラシ

単位：概要地  
（東北隅が成層？）  
【第一期造成】

E: 6段  
N: 16段

木組遺構01下段01  
出土：漆器類

木組の解剖  
文献上段なし  
【第二期造成】

木組の解剖  
文献上段なし  
【第三期造成】

落札込み01  
木組遺構01下段01  
出土：漆器類

落札込み01  
木組遺構01下段01  
出土：漆器類

第32図 旧柳町一丁目地点の遺構・造成の変遷

はまったくなかった。出土陶磁器はすべて被熱していたため、火災などの罹災が想定された。文献史料によると、安政の大地震により甲府市中に火災が発生した記録がある。遺物集中01は当該期に投棄された遺物群に比定される。

甲府城下町の町人地では、近世以降連縄と続く都市として、同じ場所に人々が生活面を何層も設けることが当然のように行われる。特に大火や洪水などに罹災した場合には、大規模な造成が行われる。今回の調査でも、土層の観察により数度の火災による被害が想定された。

## 第2節 水場遺構01の構造と機能

第2期遺構面より検出した水場遺構01は、甲府城下町遺跡の町屋の空間利用にとって、他に類を見ない。検出層位は地山上に形成された第1期生活面（標高約263.9m地点）上面から、約20cmの層厚の盛土状に形成された生活面上（標高約264.1m地点）にある。水場遺構01の構造は3ヶ所の区画とその区画の接続部に設けられた2つの堰、区画の北東隅に接続する木組みの水路（水路01）が複合している。ここでは、水場遺構01の構造とその機能について検討する。

区画3は第2期遺構面を形成する生活面（盛土層）を掘り込み、壁面に側板を取り付けて内側に杭で留める形で壁面の保護を図る。掘り込みの上部構造には、上面が平坦な巨礎を配する。この構造は井戸で言うところの井桁に該当し、区画内に土砂等が流入することを防止するほか、人が作業する空間を確保する機能が想定される。区画2は区画3の南側に設けられた堰2を経由して接続する。底板と側板により構成されており、木組みの導水施設の様相を呈する。区画1は区画2の南側に設けられた堰1を経由して接続している。底板は区画2と共有しており、区画2同様導水施設としての機能が想定される一方、側板には矢板が用いられ、区画2に比べて広く区画が設けられている。

木組み水路（水路01）は遺存状態が悪く区画3との明確な接続部分は確認できなかつたが、水路側板の内側で留める構造であり、区画3の土留め構造と共通する。杭の太さや間隔も区画3のものと酷似していることから、水場遺構01に組み込まれた構造と理解している。側板と底板は比較的薄く、底板はへぎ板のような材が使用されていることから、「下水木樋」に分類されると想定する。木組水路および水場遺構における導水の方向は調査にて明らかにできなかつたが、ここで南北双方向に場合分けをして、それぞれの条件における遺構の機能を類推する。

### i) 導水方向が北から南の場合

甲府城下町の自然地形をかんがみると、北から南への導水方向は理にかなっているといえる。ただし、城下町形に伴う造成が行われていることから、その逆も可能である。当条件の場合、区画3へ流れる水源は水路01の先にある。前述通り水路01は下水木樋の蓋然性が高く、区画3に溜まる水も下水となる。よって、区画3は下水道に付帯する施設として、下水道内の塵芥を沈殿させる「芥溜」のような機能が想定される。

### ii) 導水方向が南から北の場合

当条件の場合、区画3の水源は上水を引き込むことが可能である。区画3・2より出土した遺物は、完形の陶磁器をはじめ漆椀や箸といった食膳具を主体としている。これらの食膳具が機能時に混入したものであれば、食膳具などの洗浄を目的とした上水施設と断定できる。上水であれば、区画3は水洗や調理空間として理解でき、町屋空間に組み込まれた台所に関連すると考えられる。課題は区画3より流出する下水の先が不明であることに加えて、甲府城下町の自然地形に反する傾斜であることである。

以上、2つの条件設定のもと遺構の機能を考察した。水場遺構01の構造と出土遺物により機能を「芥溜」と「水洗空間」に類推したが、筆者の管見の及ぶ範囲で想定したものである。今後も調査成果の精査や事例の増加により新たな知見が得られるかもしれない。

### 第3節 柳町一丁目の土地利用－享和三年「柳町家持表口間数御改帳」を中心に

調査地点は内城南東の外郭、町人地に位置し、八日町通り・甲州街道と柳町通りが交差する交差点地点（北東隅）で、柳町一丁目の町に属していたと思われる。町は、道路が町の境界線ではなく、一本の道路を挟んで向かい合った土地が同じ町になる両側町として形成されていた。

調査では、中世から江戸時代初期頃の生活面第1期から東西方向に礎石が並ぶ江戸時代初期頃礎石建物跡（第1期礎石建物跡01）が検出されている。また八日町通り・甲州街道に近い地点でカマドを検出したことからこの土地は、建物の間口が柳町通りにあり、東に向かって細長く伸びる区画で土地を利用していたのではないかと考えられた。

ここでは、調査地点が柳町一丁目の町に属し、間口は柳町通りにあったと仮定し、古文書資料と現在の区画とを比べてみるととした。

『甲州文庫』（山梨県立博物館蔵）に所収されている享和三（1803）年の「上下府中各町家数間数改帳」、名主権右衛門作「柳町家持表口間数御改帳」には、柳町一丁目から四丁目における各家の屋敷規模（間数）が記録されている。この資料より江戸時代後期（1803年）に柳町一丁目の柳町通り面した家の間口の寸法がわかる。

柳町一丁目西側北ノ角	同町一丁目東側北ノ角
表口九間半裏行町並	表口四半間半裏行町並
表口五間半裏行町並	表口五間半裏行町並
表口六間半裏行町並	表口六間半裏行町並
表口七間半裏行町並	表口七間半裏行町並
表口八間半裏行町並	表口八間半裏行町並
表口九軒	表口九軒
家数小以九軒	家数小以九軒
小間六拾間半	小間六拾間半

柳町一丁目の家の間数 「柳町家持表口間数御改帳」より抜粋 ※家の人名等は省略

柳町の一丁目の西側、東側ともにおそらく北の角から「柳町家持表口間数御改帳」に書かれた順番で家が並んでいたと思われる。西側は3間半から9間の間口の家11軒が建ち並び、南北の長さは60間半ある。東側は4間半から10間の間口の家9軒が建ち並び、西側同じく南北の長さは60間半である。

現在の都市計画地図（25,000分の1）の該当する柳町一丁目の南北の長さを計測してみると、西側と東側のいずれも4.7cmであり、実際の長さは117.5mであることになる。60間半をメートルに換算すると（1間 = 1.81818m）109.99…m、現在の長さより7.5m程短いことになる。約7.5mの空間には何があったのか。1つの想定として西側11軒それぞれの家の間に空間があるとすると1軒1軒の間に約75cmの空間が生まれる（東側は9軒で約93cm）。当時は、地境等に石列や石組み水路があることが造られることがあり、今回の発掘調査でも石列や石組み水路（第3期：幕末から近代の生活面）を検出している。75cmの空間間に地境の石列や石組み水路が造られたかもしれない。

裏行について、「柳町家持表口間数御改帳」には、



第33図 旧柳町一丁目等区画計測図

西側の北から3軒の家と9軒目の家ののみに裏行の数値が記載されている。どれも長さは22間であり、間口は7間、5間、3間半、7間となっており、長細い区画となっていることがわかる。西には二の堀が巡っており、その付近まで家があったと推測される。

#### 第4節 道構の構築と地盤について

甲府城下町道跡は、近世以降現在まで継続する都市遺跡である。そして、その道構や遺物は現在の甲府の町の下に真空パックされた状態で遺存しており、発掘調査を通じて近世に暮らす人々の生活様式を生きしく再現することが可能である。一方、甲府城下町道跡の範囲で実施される発掘調査は狭小地が多く、断片的、限定的な情報しか得られないことが多い。発掘調査で検出する道構にとって最大限の調査成果を得るために、今回の発掘調査を通じて痛感した後悔や反省点を基に、これから城下町の調査における注意点を共有したい。

近年、江戸城下の町人地でも、低地の盛土とそれに付帯する排水施設などの構造物の様相が注目されつつある（関根2016）。甲府城下町に暮らす人々にとって、インフラの整備は生活域の確保において重要な作業であつただろう。インフラ整備にみえる土木技術は、その構造物だけをみて把握されるものではなく、地盤との関わりを検討したうえで、理解する必要がある。そして、その検討は発掘調査現場でしか行うことができず、また、調査担当者だけの目で見て判断するのは誤認などのリスクを伴う。そのため、発掘調査では現地にて複数人で検討し、地盤や造成土などに対する理解を深めることが肝要である。

第1節では、今回の調査で確認した道構とそこから出土した遺物の年代を整理し、地盤造成と災害の歴史について言及している。今回の発掘調査では、調査担当者である筆者の地盤や造成土と構築された道構の土木技術に対する見識が少なく、道構の検討を土木構造的に十分な議論が出来なかった。この点は十分反省したいところである。

#### 【参考文献】

関根信夫2016「インフラ整備にみる町人地の形成—低地町屋における盛土層・排水施設を中心として—」『江戸の町人地2—道跡から見る近世都市江戸〔発表要旨〕』－江戸遺跡研究会第29回大会 江戸遺跡研究会

事前調査	発掘調査	整理作業
<ul style="list-style-type: none"><li>①土地利用の経歴確認<ul style="list-style-type: none"><li>・絵図、文献、古写真、古地図</li><li>・武家地か、町人地か</li></ul></li><li>②現地の確認<ul style="list-style-type: none"><li>・露出している道構はないか</li><li>・微地形の観察（高低差など）</li><li>・街路、街区との距離感</li></ul></li><li>③試掘調査<ul style="list-style-type: none"><li>・道構面数は何面か</li><li>・本質遺物の道存度</li><li>・土質の検討</li></ul></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>①道構の検討<ul style="list-style-type: none"><li>・土木技術の検討</li><li>・道構の罹災の有無</li><li>・構築地盤の強度</li><li>・現地における道構検討会の実施</li></ul></li><li>②自然科学分析<ul style="list-style-type: none"><li>・堆積層の標準化</li><li>・堆積土の強度と透水性</li><li>・地下水の水質調査</li></ul></li><li>③測量<ul style="list-style-type: none"><li>・座標データの取得</li></ul></li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>①検出道構の検討<ul style="list-style-type: none"><li>・道構の分類と属性</li><li>・検出地点と街区の空間把握</li><li>・尺貫法、長さ重きの基準</li></ul></li><li>②遺物の取り扱い<ul style="list-style-type: none"><li>・本製品の保存処理とサンプリング</li><li>・流通素材の観察</li><li>・遺物図化委託業務</li></ul></li><li>③甲府城下町道跡調査経歴書<ul style="list-style-type: none"><li>・調査票の記入とデータの保管</li></ul></li></ul>

# 写 真 図 版





調査区周辺の市街のようす（南から愛宕山を望む）



調査区第3期遺構面（西区）の遺構検出状況（東より）

## 写真図版 2



調査区第2期遺構面（西区）の遺構検出状況（西より）



調査区第1期遺構面（西区）の遺構検出状況（西より）



調査対象地近景



調査前の状況



調査風景



第1回遺構検討会（平成27年6月11日）



第2回遺構検討会（平成27年6月23日）



調査区東壁の基本土層堆積状況



礎石建物跡01の礎石配置



礎石建物跡01 級石05

## 写真図版 4



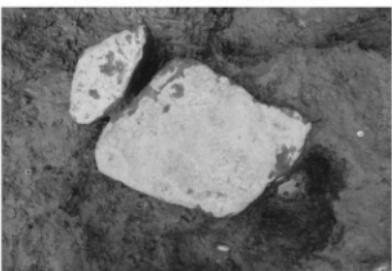
礎石建物跡01 碓石06



礎石建物跡01 碓石07 柱検出状況



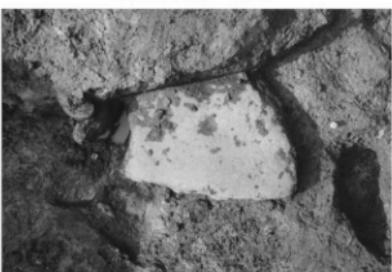
礎石建物跡01 碓石08 柱検出状況



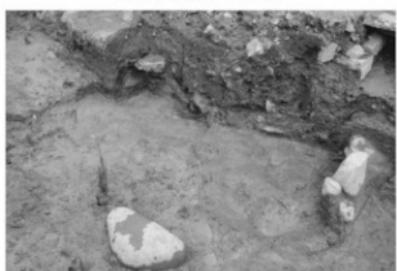
礎石建物跡01 碓石09



礎石建物跡01 碓石10



礎石建物跡01 碓石11



カマド01 検出状況



カマド01 炭化物、焼土、灰検出状況



水場遺構01 完掘状況



水場遺構01 区画01・02 導水施設のようす



水場遺構01 区画03 区画状況



水場遺構01 東側区画の石列検出状況



水場遺構01 東側区画の石列 下層構造の状況



水場遺構01 区画03の土留め構造

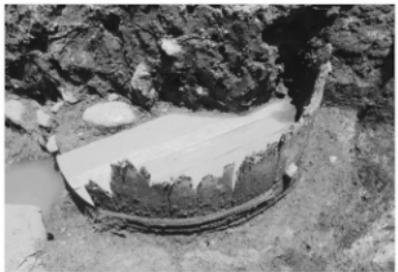


水路01 検出状況



木組遺構01 検出状況

## 写真図版 6



土坑03（埋め桶）完掘状況



土坑03（埋め桶）木栓



土坑04 完掘状況



落ち込み02 材木検出状況



溝01 完掘状況



溝02 完掘状況



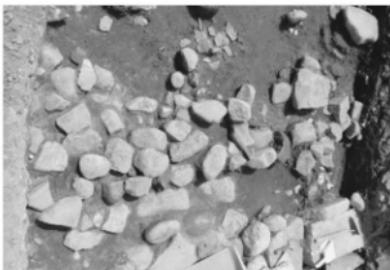
土坑01 検出状況



土坑02 検出状況



石列01 検出状況



石列02 検出状況



石列03 検出状況



礎石建物跡02 硏石の配列状況



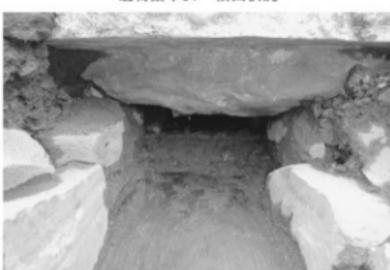
礎石11 検出状況



遺物集中01 検出状況



水路02 検出状況



水路02 調査区北外へ続くようす

## 写真図版 8



焼土01 検出状況



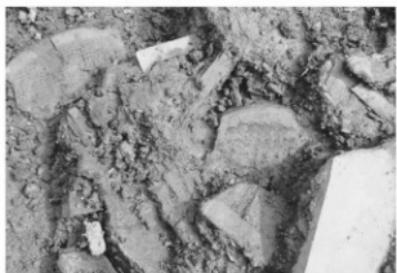
遺物出土状況 (003・アワビ)



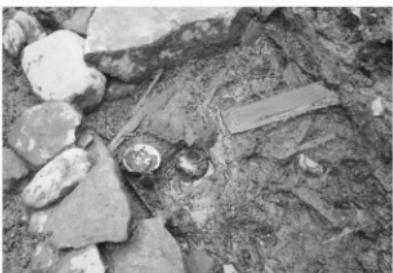
遺物出土状況 (089)



遺物出土状況 (035)



水場遺構01区画01 遺物出土状況



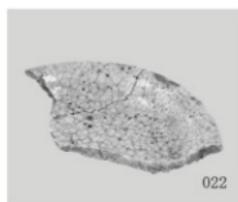
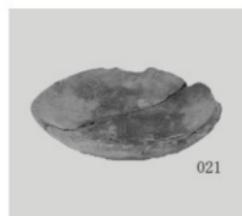
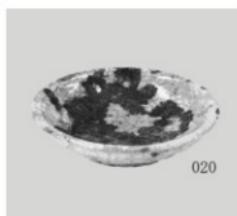
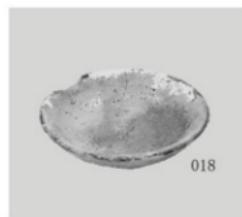
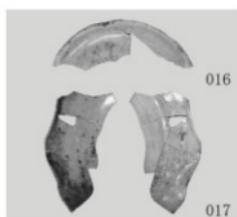
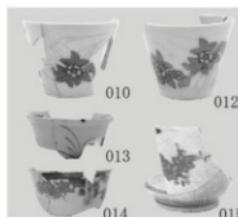
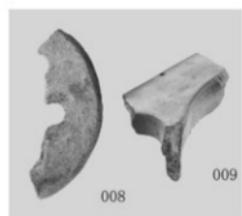
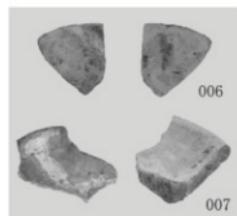
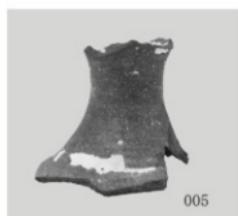
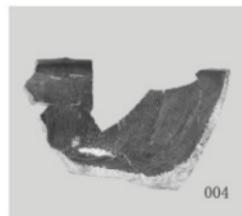
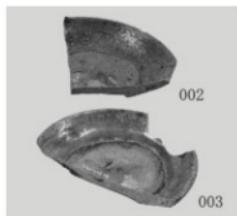
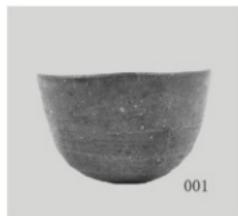
水場遺構01区画03 遺物出土状況



遺物出土状況 (217)

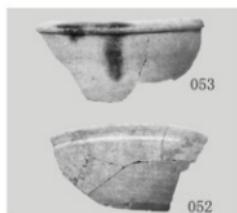
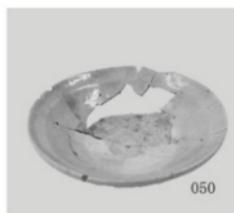
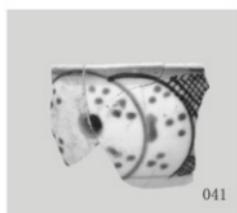
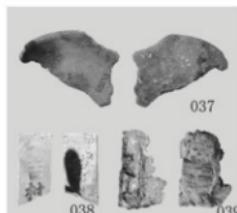
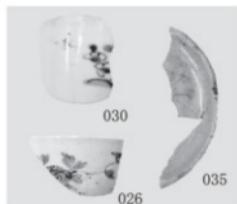


遺物出土状況 (027)

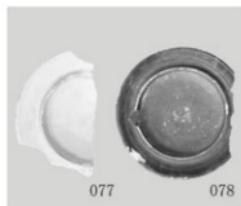
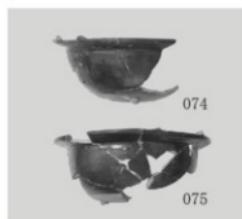
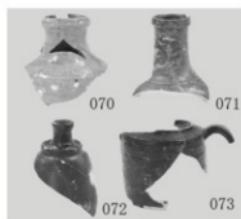
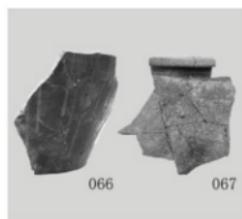


出土陶磁器・土器（1）

## 写真図版10

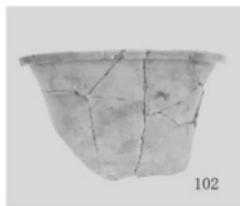
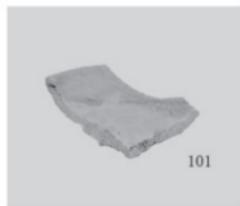
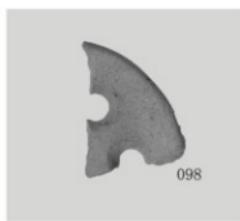
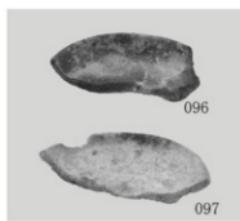
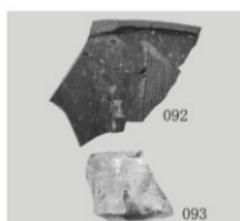
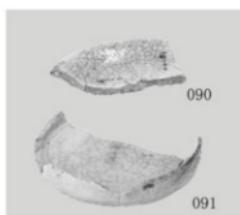
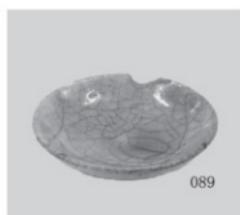
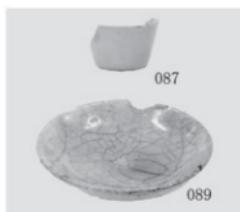


出土陶磁器・土器（2）

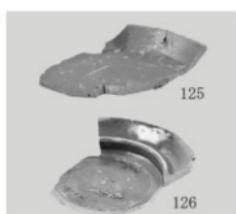
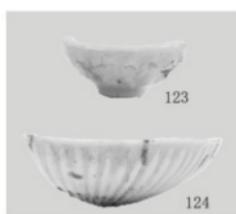
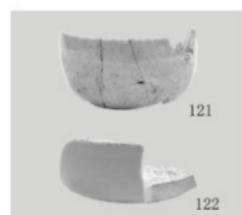
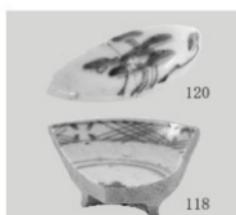
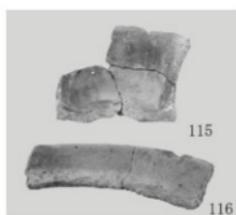
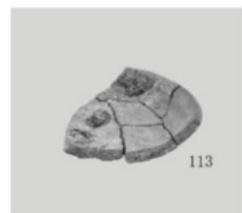
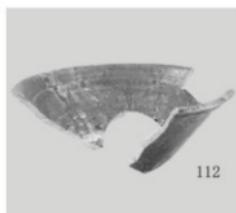
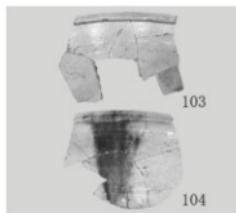


出土陶磁器・土器（3）

## 写真図版12

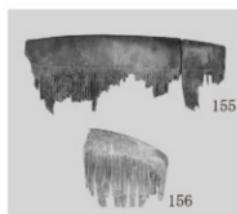
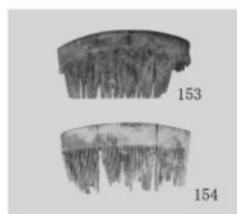
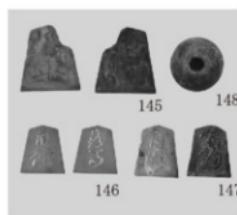
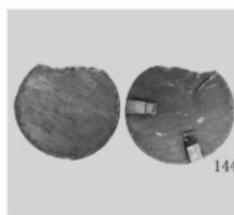
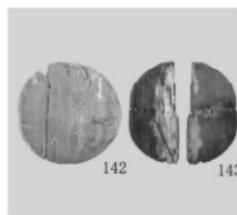
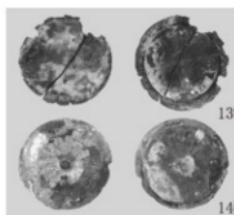
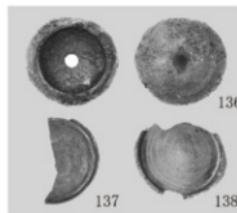
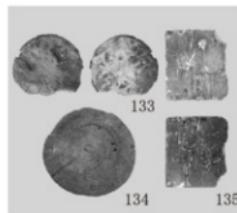
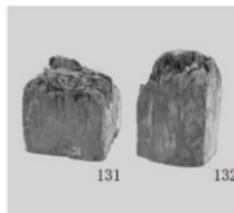
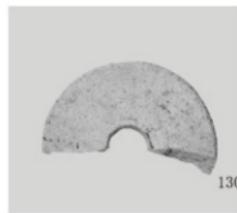
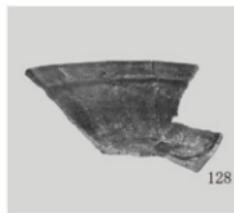


出土陶磁器・土器（4）

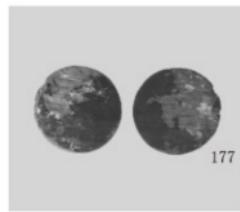
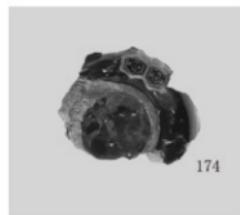
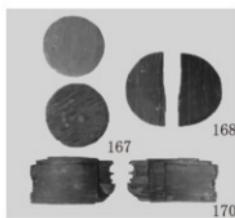
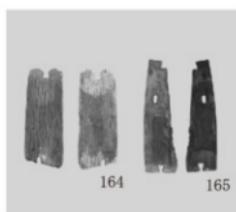
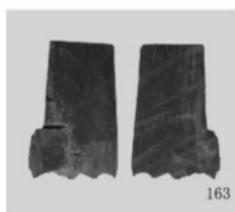
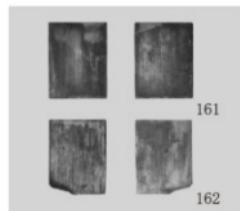
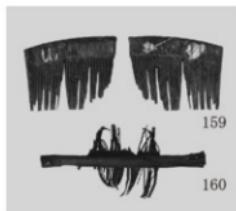


出土陶磁器・土器（5）

写真図版14

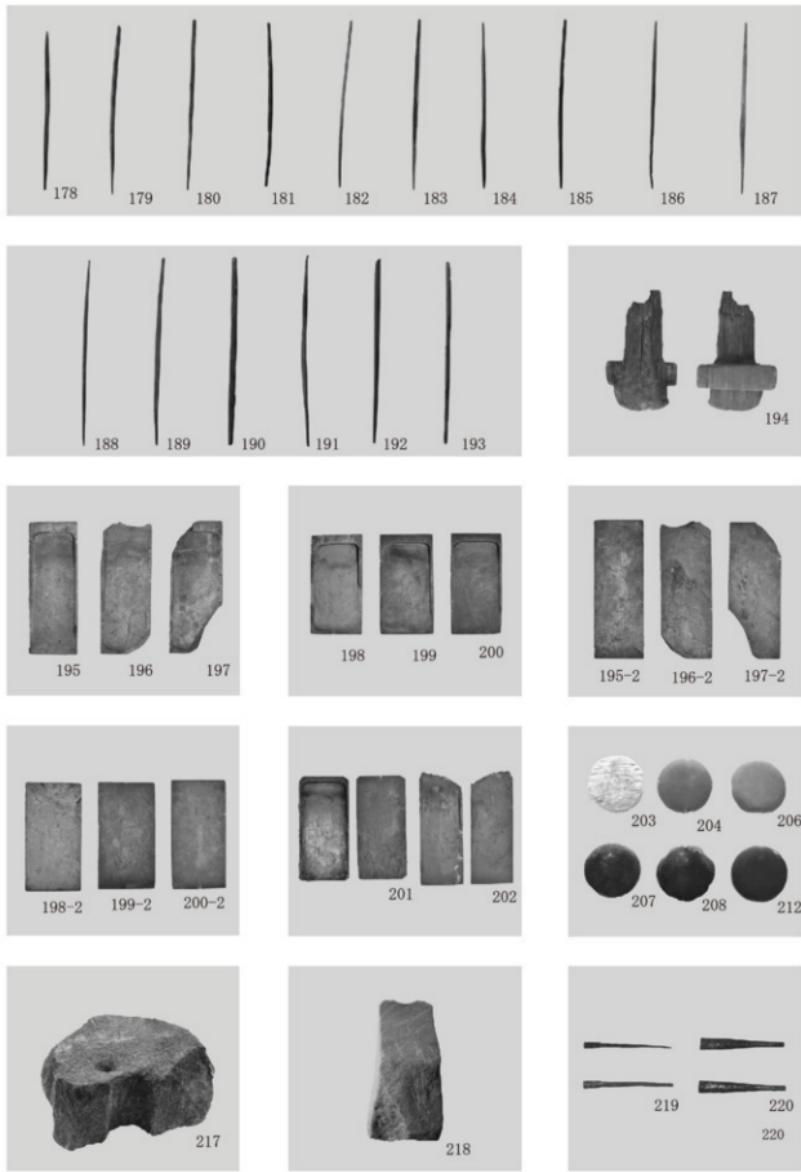


出土陶磁器・土器（6）木製品（1）

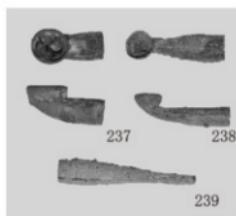
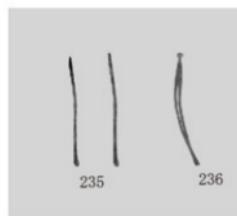
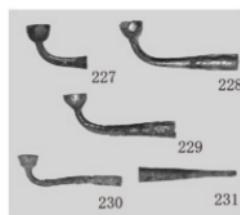
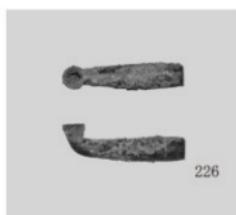
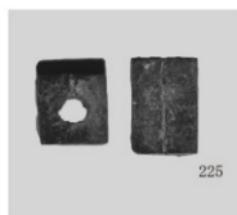
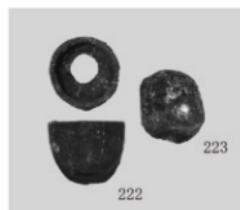
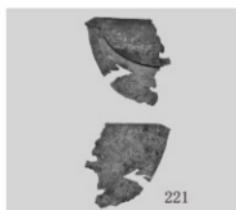


出土木製品（2）

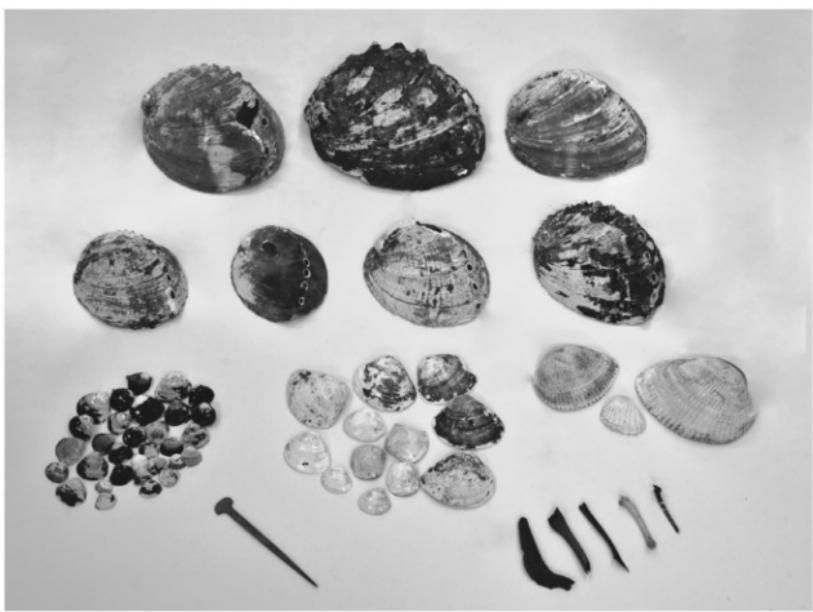
## 写真図版16



出土木製品（3）金属製品（1）



出土金属製品（2）



出土骨・貝集合写真



# 報告書抄録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき							
書名	甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）							
副題	（都）古府中環状浅原橋線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第308集							
著者名	御山亮清・上野桜							
発行者	山梨県教育委員会、山梨県土整備部							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行年月日	2016年3月15日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
こうふじょう かまちいせき	やまなしけん こうふし ちゅうおうにちょうめ 甲府城下町 遺跡	19201	253	35° 39° 39°	138° 34° 21°	平成27年5月25日 ～ 平成27年6月26日	33.7m <sup>2</sup>	都市計画 道路改築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
甲府城下町 遺跡	城下町	近世	建物礎石、カマド、水 場遺構	陶磁器類、木製品	江戸時代初期の町屋遺構	江戸時代中期の水場施設		

## 要約

本遺跡は甲府城下町遺跡のうち、甲府城南東に展開する町入地に位置する。江戸時代を通じて宿場町として栄えた「柳町」一丁目にあたり、調査では町屋の建物跡やそれに付属する土間やカマドを発見した。また、江戸時代中期の町屋に組み込まれた水場遺構がみつかり、その中から大量の木製横櫛や基石、将棋の駒などが出土した。また、狭小な調査範囲でありながら多くの遺構・遺物が検出しており、当調査地点における土地利用の濃さや宿場町としての様相がうかがえる。

## 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第308集

### 甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）

（都）古府中環状浅原橋線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日 2016年3月15日

発行日 2016年3月15日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

山梨県土整備部

印刷 株式会社峠南堂印刷所